

刀花幽明譚～とある肺病を病んだ剣客と吉原の少女のつかず離れず
の話

高田正人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幕末。肺病を病み異形の剣を振るう剣客、志度光悦（しどこうえつ）は、とある妓楼で「藤」という名の少女と出会う。彼女は光悦に言うのだった。「お侍様。この廓の一番の花魁に鬼が憑いております」。鬼を斬る依頼を受けた光悦は、残り少ない命でこの禿（かむろ）と不思議な縁でかかわっていくのだった。

光悦：「……拙者は童女に懸想する趣向はありません」

周囲：「こりや惚れてるな」「間違いなくそうだな」

目次

第1話：花見はお嫌いですか？ 光悦様	1
第2話：……人を、斬りとうございます	6
第3話：妓楼に来て、女の柔肌に触れないで帰るなんて無粋ではないですか	11
第4話：……一つ聞きたい。斬ってもよいか？	16
第5話：この鬼を斬る依頼、受けてくれないだろうか	21
第6話：初めて刀を持つ手が震えた	27
第7話：ある夜たちの悪い盗人たちが押し入ってねえ、あの子以外みんなお陀仏さ	32
第8話：……ならば、今ここで死ぬ	36
第9話：とと様……かか様……	40
第10話：そこまでして刀の道を極めたかったのか？ 返答次第によつては、儂にも考えがある	44
第11話：光悦ももちろん行くよな	49
第12話：ご安心を。光悦様と駆け落ちはしませんから	52
第13話：旦那あ、青田買いはよくありませんぜ	55
第14話：もしかして私、光悦様に口説かれているのでしょわか？	58
第15話：血の臭いがします、光悦様	63
67 第16話：それで、お前さんの小野小町はどんなお人なんだよ？	
第17話：……猫です	72
第18話：莊子楼へようこそ。歓迎しよう、盛大にな	76
第19話：……許せ、とは言わぬ。済まなかった	80

第20話：その病が、お前の剣の道を絶つてもか？	85
第21話：……ならばせめて証を残したい	90
第22話：お供いたしましょうか？	94
第23話：その娘の名は『藤』といったんだ	98
第24話：お前は死に損ないなどではなかった	101
第25話：未練がましいことに、人を待っているゆえ	104
第26話：俺はお前の兄弟子だ。弟のことを気遣うのは当然だ	
107	
第27話：藤は幸せだったさ。私が保証する	110
第28話：拙者もまた	113

第1話：花見はお嫌いですか？ 光悦様



黄泉の国から逃げ帰ったイザナミは、黄泉平坂に千引の岩を置いて生者と死者の境を定めた。我々の世界ではこの岩はしっかりと置かれ、現世と異界は隔てられている。しかし、この世界ではごくわずかに隙間があつたらしい。幕末の江戸。この世界の日ノ本では、現世に時折あつてはならないものが迷い込み、時に益をもたららし、時に害をなす。

日ノ本の男児たるもの、人のみならず異界のものもまた斬る覚悟が必要だった。そんな剣客が闊歩する幕末の江戸。外刀（げとう）流の看板を掲げる道場に一人の若き剣客がいた。仕置きや暗殺、多対一、深手を負った時の体捌きなど、およそ優美や流麗とはかけ離れた剣を教える外刀流。それを学ぶ青年の名は——志度光悦（しど こうえつ）。



桜が咲いている。満開を過ぎた、やがて散る者を見る者に予感させる花盛りの後の桜が。うららかな春の日の午前中。花筏のできた川の土手は、花見を楽しむ江戸の町人たちでにぎわっていた。川を船頭が舟歌を歌いつつ、竿で舟を進めていく。太平な江戸の一コマだ。天下太平の徳川の世が続く、人々の顔や服装にも余裕が感じられる。一本の老いた桜の木の下に、一人の剣客が腰かけていた。まだ若い青年と言つてもいい年頃だろう。しかし、一目見て病身と分かる外見だ。脂気のない伸ばしただけの長髪。張りのない肌。痩せた手足。肺を患っているのだろう。呼吸は不規則で浅い。やや頬のこけた陰鬱な顔つき。ただ双眼だけが、濁った中に熾火のような熱を揺らめかせている。

腰には飾り気のない鞘に収められた大小の刀。まるで彼の体の一部のようにそれは馴染んでいる。剣客の名は志度光悦。江戸でも有名な外刀流の門下生である。

「花見はお嫌いですか？ 光悦様」

鈴を振るような可憐な声でした。

「どうしましょう。お団子は用意しておりません。今から近くの屋台で買ってきましようか？」

じろり、と光悦は声が出た方を見た。巻いたむしろを背に背負い、手に風呂敷に包まれた重箱を重そうに持つ、一人の少女がいた。吉原で遊女の身の回りの世話をしつつ、自分もやがて遊女となる禿（かむろ）と呼ばれる少女だ。年齢は十代の初めほど。年齢相応の小さくてきやしゃな体を朱色の着物に包み、髪は切りそろえたおかつぱだ。

「……藤」

光悦は禿の名を呼ぶ。小さな人形のようなその姿は、庇護欲をそそる可愛らしさだ。ゆらり、と光悦は白煙のように立ち上がると、手を伸ばして風呂敷を代わりに持った。

「ふふ、目ざとい方ですこと。おなごはそういう細かい気づかいのできる殿方に弱いのです。覚えておいてくださいね」

くすくすと嬉しそうに藤は笑う。

およそ少女らしくない振る舞いと言葉遣いだ。肝が据わっている、という言葉では片づけられないほど落ち着き払っている。

「……なぜ、ここにいる？」

光悦は尋ねた。吉原の太夫も、桜の盛りには目立つところで花見としゃれこむらしい。行き交う人々は花を愛でつつ彼女たちの艶姿に目を奪われることだろう。廓のいい宣伝だ。

「まあ、よいではないですか。そんなに詮索しないでくださいませ」

しかし、周りを見回しても太夫らしき人物もいなければ、妓楼の関係者と思しき人影もない。当の藤は、さっさと桜の木の下にむしろを敷き始めた。

「……拙者と一緒にはお主まで笑いものになるぞ」

胡乱な剣客が童女を侍らして花見とは、口さがない町人のいい噂の

種だ。

「あら、私は別に構いませんよ」

「……拙者が嫌なのだ」

「なら、気にしなければよろしいではないですか。人の噂も七十五日と昔から申しますよ」

無言になった光悦の前に藤は座ると、光悦の手から風呂敷を受け取り、持ってきた重箱を広げた。

「……もし足抜けならば、今のうちに止めておけ」

光悦は眉を寄せる。

遊女が廓から逃げ出すことを足抜けという。連れ戻されればひどく折檻されるらしい。もつとも藤は禿だ。まだ遊女ではない。しかし、たとえそうであっても逃げ出せば探し回され、連れ戻されて仕置きされるだろう。

「違います。もう、光悦様に粹を求めは致しませんが、あんまり無粋では私も困ってしまいます」

藤は不満そうに頬を膨らませる。

「……すまぬ」

「冗談です」

ころりと表情を変えて、藤は笑った。万華鏡のような少女だ。一瞬で表情がころころと変わる。しかし同時に、それは乱反射する光の作り出す幻像であるかのように危うい。どこかひどく脆く、儂く、危険な香りがする。まさに将来の太夫が約束されたかのような禿だ。恐らく何人もの男を手玉に取ることだろう。

「昼餉にいたしましょう。まだ日は高いのでお酒はありませんが、お茶を淹れますよ」

自分の横をぽんぽんと叩く藤を見て、光悦は当惑した。まるで押しかけ女房だ。いや、おそらく廓では金さえ積みめば、そういう状況を演じることだってできるのだろう。今日の前にいるのが年端も行かない童女でなければ、吉原の客引きの一環かと勘違いしそうだ。

「……お主を買った覚えはない」

仕方なく光悦はそう言う。禿を買うなどもとより正気の沙汰では

ない。数寄者でもしないことだ。青田買いにもほどがある。しかし藤は当然のような顔で頷く。

「はい。私も今日は光悦様にお買い上げしていただくつもりはありません」

「……では、なぜ」

「本日は、朗報をお伝えに参上いたしました」

「……なに？」

わずかに藤が居住まいを正したので、光悦は興味を惹かれて腰を下ろす。

「先日、朝起きましたら着物にわずかに血が付いておりました。女陰（ほと）からでした」

「……そうか」

何と言つていいのか分からず、光悦は目をそらした。これまで身近に異性の姿がなかった光悦には、女性の体の都合はほとんど知ることのない事柄だった。

「姐さん方に聞きましたら、これがおなごの月のものの始まりだとか。晴れて私も女の仲間入りでございます」

つまり藤は初潮を迎えたということになる。

「……めでたいことだな」

光悦は言葉を濁しながら相槌を打つ。めでたい、とは言ったものの、それは藤の遊女としての生の始まりでもあるのだろう。

これが何を意味しているのか、藤とて知らないわけではない。華やかな吉原は同時に苦海でもある。あたかも剣に生き、剣に溺れ、剣に死ぬ剣客と同じように、女を武器として男を客として迎え入れる遊女。それが藤の将来であり、初潮によってその道が開けた。やがてはこの童女も一人前の太夫として、吉原の顔となることだろう。

「……女の仲間入りというが、まだ始まったばかりであろう。お主はまだ幼い」

藤の口調からは、彼女の感情は読み取れない。姐さんと慕う太夫たちに近いと喜んでいるのか、それともこれからを思つて気が重いのか。ただ、朗報と言つたのは事実だ。

「ですが、嬉しいお知らせでしたので、光悦様にお伝えに参りました」
居住まいをわずかに正し、藤は自分の腹に手を当てる。

「もう少しだけお待ち下さい、光悦様。光悦様のお望み通り、あと少し成長いたしましたら、その時は——」

帯越しにそつと腹部を撫でつつ、藤はほほ笑む。年齢にはあまりにも不相応な艶やかな笑みで。

「光悦様のお子を身ごもることも、やぶさかではありません」



志度光悦は目を開けた。

「……やはり、夢か」

空気さえも凍ったような真冬。辺りは薄暗い。夜が明けて間もないのか。五体は重く、指一本さえ動かすのが億劫だ。息を吸い、吐く。それだけで重労働だ。

「……未練がましきこと、この上なし」

自分に言い聞かせるように光悦は呟く。従容として死に趣くことなく、未だに自分は生に縋り付いている。

自分には春はもう来ない。間違いなくもうじき自分は死ぬ。生涯共にあった肺病に、とうとう自分は負けた。ずっと背に感じていた死神に、そろそろ追いつかれるようだ。それが悲しくもあり、虚しくもあり、けれども安堵もしていた。光悦は目を閉じる。彼の意識は過去をさかのぼっていく。あの藤という風変わりな禿と出会う、少し前の日々へと。



第2話……………人を、斬りとうございます



「勝負あり！　そこまで！」

「くっ……………見事！」

道場に声が響く。道場破りを常とする巨漢は、木刀を振り上げたままの姿勢で固まっていた。それもそのはず。彼と対峙……………いや、地を這うような姿勢で道場の床に伏せているのは志度光悦。その右手が鞭のように伸ばされ、ぴたりと道場破りの喉元に木刀を突きつけていた。

「……………勝負あり。拙者の勝ちか」

死んだ魚のような目に青白い肌と総髪。幽鬼の如き姿の志度光悦は、道場破りに突きつけた木刀を引くと静かに呟いた。道場破りは一礼して去っていく。

「江戸にも未だ狼の巣があるとは……………快なり」

それを見送ることもなく、光悦はふらりと立ち上がり、道場の奥へと消えていった。道場破りの後を追う他の門下生の騒ぎが、少しずつ遠ざかっていく。



「光悦、よくやってくれた。あの道場破り、先日は北神一燈流のところまで門下生を三人同時に相手取った強者よ」

外刀流免許皆伝、白髪白髭の長谷川正忠（まさただ）は、台所でフナをさばきつつそう言った。彼は六十半ばにして、江戸でも随一の剣術使いである。

「……………お師匠様」

「なんだ？」

「……………いえ、なんでもありません」

光悦は死人のように再び黙する。

「昨夜も、亡者相手に稽古をしてきたのか？」

「……はい」

平然と答える光悦に、正忠はため息をついた。

「まったくお前という奴は。何度儂が岡つ引きに呼ばれて奉行所に引き出されたことか。墓場で痩せた男が抜き身の刀を抜いてぼんやり立っている、と町人の間でもつぱらの噂だぞ。稽古ならば儂の門下生とやればよかろうに」

「……亡者ならば、遠慮なく斬れますゆえ」

「やれやれ」

正座したままぼそりと言う光悦の言葉に、正忠は再びため息をつくしかなかった。この男、志度光悦は生まれつき病弱であった。幼いころから何度も大病を患い、満足に立つこともできないほど身体が弱っていた時期もあった。しかしそれでも、彼は剣の道を諦めなかったのだ。

誉も恥も知らず、ただ戦場で生き延びることのみを追求する覇道の剣術、外刀流。そんな流派に入門した彼は、血反吐を吐いて修行に励んだ。そして上り詰めたものの、彼の身体には致命的な欠陥があった。それは死病である。肺を患っている彼は、激しい鍛錬によってしばしば呼吸困難に陥り、道場の床に倒れ伏して気を失う。

しかし、その度に光悦は黄泉路に迷った死者のように刀を握り、鬼気迫る面持ちで立ち上がるのだった。外刀流からすれば「我が流派の鑑なり」と誉めるべきであるが、同時にこの太平の世にあつては忌むべき存在でもあった。亡者を斬るところから亡者同然の男が刀を振るっている姿など、御前試合で披露することなどできないのも当然だ。

「光悦、お前はもう十分やった。そろそろ嫁を貰い、身を固める気はないのか？ それとも何か他にやりたいことがあるなら手を貸すぞ？」

正忠は、包丁を器用に動かしながらそう尋ねた。

「……ますます」

「うむっ？」

正忠が問うと、光悦はその生氣のない目にわずかの妄執をのぞかせつつ言った。

「……人を、斬りとうございます」

びっくり、と光悦の指が動いた。まるで死体の上で蛆虫が這うような動きだ。人を斬る。斬り殺す。殺める。その体験を剣客として熱望するのは理解できる。けれども、光悦のそれはあまりにも濁りきった欲望だった。

「光悦。やはりお主は病んでおる。まあよい。あの道場破りを退けたことは誉めねばなるまい」

「……ありがとうございます」

あくまでも礼儀正しく深々と頭を下げる光悦を見て、正忠は小さく嘆息した。

（つくづく、時代を間違えて生まれた男よ。戦乱の世ならばあるいは立身できたかもしれぬ。だが……思えば外刀流とは、こういった者を救うためにあるのかもしれぬ）

やがてフナの煮つけが出来上がり、それを皆に正忠はふるまった。静かに光悦も箸をつけるのだった。



「あつはつは！ いやあ愉快愉快！ 北神一燈流さえ退けた道場破りが、お前に敗れるとはなあ！」

「……もつたいないお言葉です。石動（いするぎ）殿」

夜更け。眠らない町吉原遊郭。あつてはならないものたちのあるこの世界では、遊郭はもはや一つの異界となり、あらゆる人間、人間以外のあらゆる欲望、性癖を満たす究極の歓楽街となっていた。

そこを闊歩する外刀流の門下生。巨漢の石動有馬。田舎出身の河村勘兵衛（かんべえ）。女好きの蜂須賀甚六（じんろく）。そして志度光悦。

「へ、へへへ、さすが吉原だ。美人がいっぱいだぜ」

勘兵衛は早速目移りしている。あちこちの朱塗りの格子の向こう

では客待ちをする遊女たちが、三味線や琴をつまびきながら艶やかな笑みを浮かべている。いずれも美しい女ばかりだ。

「焦るなよ勘兵衛。ここ吉原じゃあなあ、馴染みにならなきやいい女には手え出させねえんだ」

女遊びにかけては剣よりもはるかにうまく、百戦錬磨の甚六がわざと遊女たちの前を知らんぷりして通り過ぎる。

「分かってらあ！さっさと行こうぜ！俺あ早く酒を酌で飲みたいんだよ」

「おい、あんまり急ぐんじゃねえ。迷っても知らんぞ」

そう言いつつ、甚六もどこか落ち着かない様子で辺りを見ている。

「……甚六殿。いかがなされた？」

「おう光悦か。俺あこのところ白梅っていう太夫とねんごろでなあ」

「……白梅、ですか」

白梅は、吉原でも五指に入る美女である。

「ああ。最近、お前さんは岡っ引きに呼ばれてばかりだからなあ。たまにやこういう息抜きも必要だろうよ」

「……墓場の亡者を斬っていただけなのに、白州でお叱りを頂戴するばかりです」

「亡者なら遠慮なく斬れるって言ってたが、仏さん斬つてりや罰も当たるぜ……」

呆れたように言う甚六だったが、その目は笑ってはいなかった。

「ところで光悦、お前さんの目当ては何だい？」

「……拙者ですか？」

光悦は少し考えてから、首を左右に振った。

「……今のところ、特には」

「そうかい。俺が行くところは一見さんお断りのところだから、悪いがつれていけねえな。堪忍してくれ」

「……構いませぬ」

そう言うと、石動がすかさず光悦の肩を持った。

「では光悦と勘兵衛は俺があずかろう。うむうむ、素人らしく、身の丈に合った遊びをせねばな。わっはっは」

皆に「塗り壁」とあだ名される相撲取りのような巨漢は、外見に合った豪快な笑い方をするのだった。この兄弟子は、光悦の隣に立つとその幅も厚みも彼の倍はある。暴れ牛の角を掴んでねじ伏せたという武勇伝があるが、誰一人疑う者はいないだろう。およそ対照的な石動と光悦であるが、同じ流派を学ぶ者としてその関係は極めて良好だった。



第3話：妓楼に来て、女の柔肌に触れないで帰るなんて無粋ではないですか



光悦が「……ここに致します」と言つて石動と勘兵衛と別れて入つたのは、一見さんでも喜んで歓迎してくれる小さな廓だった。「いらつしやいませ、お侍様」

愛想よく光悦を出迎えたのは、一人の禿だった。年の頃は十二歳くらいだろう。おかつぱに切りそろえた黒髪に、朱の着物。市松人形に似たあどけない容貌だが、まるで物怖じする様子がない。

「……ここは何という？」

「はい、『莊子楼』と申します。どうぞごゆるりと……と言いたいのですが、あいにく見ての通りうちは小さな廓でして、今お客様の相手ができる遊び女はおりません」

「……そうか。では、帰るとするか」

元より遊女に関心のない光悦は、きびすを返そうとした。吉原に来たのは兄弟子たちとの付き合ひの一環でしかない。

しかし、光悦の痩せた手を躊躇なく禿の少女は掴んだ。つくづく、劍客だろうと男だろうと、肺病を病んだ人間であろうと、この禿はまったく恐がる様子がない。

「まあまあ、そう言わずにお座りくださいまし。お茶くらいお出ししますゆえ」

少女は光悦の手を引き、座敷へと案内した。河の流れに逆らわない笹舟のように、光悦は彼女に従う。

やがて、湯気の立つ茶と皿に乗った菓子が運ばれてきた。

「お侍様、女子と男女の戯れ事に来たようには見えませんが、当たりですか？」

平然と禿は光悦の向かいに座つた。禿の癖に、一丁前に花魁のよう

に光悦の相手をするつもりらしい。じろりと光悦は片目で禿を見る。「……女を抱くよりも、刀を振るう方が拙者の性分に合っている」

幽鬼のよう、と形容される光悦だが、それは彼のやつれた容貌故だ。生気のない肌の色合いに、淀んでいるのに奇妙な熱を秘めた瞳。乾いた頭髪と痩せた体つきを見れば、色男と思う女性はいないだろう。しかし、それらは彼の業病故だ。無理な相談だが、もし彼が肺病から完治すれば、涼やかで剽悍とした好男子になることだろう。不可能なことだが。

「まあ恐ろしい。見せていただけですか？」

怖気を振るうことを光悦が口にしても、やはり禿はひるまない。年齢のわりに肝が据わっている。わずかに、光悦の乾いた唇が笑みの形になった。

「……承知」

次の瞬間、白刃が閃いた。胡乱な雰囲気です座布団に座っていた光悦。だが、いつ抜いたのか全く分からない速さで刀が抜かれていた。神速の、それも体勢を崩した状態での居合だ。市井の者が連想する、向き合って礼をして構えるような剣術とはあまりにも異なる。実戦向けの、虚実を混ぜた外道の剣だ。ぬるり、と刀が引かれると、ポトリと落ちたものがある。

「……蛾だ」

光悦が刀を納めるのと同時に、畳の上には真つ二つに斬られた蛾が横たわった。

「あらあら、さすがはお侍様」

「……つまらぬものを見せた」

わずかに手で鞘を撫でてから、光悦は再び座布団の上に座り直す。「いえいえ。では、私も一つ芸をお目にかけましょうか」

そう言うと、禿はそばに立てかけてあった三味線を取った。

「……ほう、もう弾けるのか」

「姐さんたちにみっちり仕込まれましたから」

三味線の音色が、座敷に響く。

「……見事だ」

「ありがとうございます。では、今度は歌の方を」

そう言うと、禿はすうつと息を吸い込み、朗々と歌い出した。子守歌だ。年端もいかない子供が故郷を思って忍び泣くという内容の歌を、禿は三味線を鳴らしつつ歌い終えてほほ笑んだ。

「……悲しい歌だな」

「物心つく前に遊郭に売られた子の歌ですからね。遊女はみな、似たような境遇ばかりです」

「……お前もか？」

「そんなようなものです。でも私は、こうして三味線を弾いているのが好きですから」

「……そうか。お主ならば、よい弾き手になれそうだ」

「まあ、お侍様ったら世辞が上手」

袖で口元を隠して禿はくすくすと笑う。

「……世辞ではない。剣客たるもの、耳は鍛える。善き音と悪き音の区別はつくつもりだ」

五識を研ぎ澄ますのが剣客の常である。自然と楽の音の善し悪しもある程度は分かる。禿の三味線と歌は、少女のそれにしては洗練されていた。不思議と、光悦はこの禿との時間に心地よさを見出していた。元より彼は病弱の身。狂ったような剣の中でしか、生を実感できないはずだ。剣とは無関係なこの禿との時間は、なぜか落ち着くのがあった。

「お侍様。お気に召されたようですのでご一献いかがですか？」

そう言うと、禿は徳利と猪口を持ってきた。

「……いや、拙者は酒は飲まぬのだ」

禁酒を課しているわけではないが、光悦は酒はあまり飲まない。酔って剣の腕が落ちるのは論外であるし、そもそも体が弱いので酔っても不快感の方が勝る。

「まあまあ、そう仰らずに」

光悦が断つても、するりと禿は光悦の隣に座る。やはり将来の遊女だ。商売に長けている。

「……そうか。では、たまには頂戴しよう」

あまり断り続けるのも無粋と思い、光悦は酌をしてもらい猪口を傾ける。

「……良い酒だな」

「酔うだけが酒ではありませんよ。味や香り、のど越しも楽しんでこそお酒ですから」

座敷に招かれ酒席を共にする。これでは普通の花魁と変わらないな、と光悦は苦笑した。

「……まるでお主は一丁前の花魁だな。客と戯れ、酒を注ぎ、軽妙な話術で翻弄する。ここはよい妓楼だ」

「ふふ、では花魁らしく、姐さん方に習った手練手管もお見せしましょうか?」

禿は光悦の手を取り、自分の方へと導く。

「……おい」

「お侍様は私のような童女に興味はないですか?」

「……いくつだ?」

あまりにも禿が平然としているので、思わず光悦は問う。

「ネズミが一周するほど」

「……まだ幼いな」

要するに十二歳ということだ。

「それがよいとおっしゃる殿方もいらつしやいますよ。……どうですか? お侍様」

「……どうとは?」

「男衆に触れられたことのない私の体ですよ」

禿はゆつくりと光悦の膝の上に乗ってきた。

「……そこまでしろとは言っていない」

光悦は顔色一つ変えずに、禿の肩を片手で押して制する。男女の睦み合いは光悦の関心外だ。我が身の業病に対処するのと、その死に物狂いの中に剣の妙技を見いだすのに精一杯で、光悦の身の回りに女っ気というものは今の今まで全くなかった。

「妓楼に来て、女の柔肌に触れないで帰るなんて無粋ではないですか? ……確かに、その通りだ」

禿はそつと、光悦の唇を奪った。

「……んっ」

光悦は瞼を閉じずに、どろりとした目のまま禿の顔をじつと見る。まるで思い人にするかのように、禿は目を閉じて愛しげに光悦に唇を重ねる。

「……お主は、本当に禿なのか？」

「さあ？」

そう言うと、禿はまた口づけをする。

「……お主の年で一夜妻になれるとは思えぬな」

ならばなぜここに禿はいるのか。姉分の遊女に、今のうちに慣れておけと放り出されたのか。

「ええ。だから私はいまだに生娘のまま。無理やり花を散らそうとする野暮天な殿方もおられないので、それなりに幸せです」



第4話……………一つ聞きたい。斬ってもよいか？



口づけを止めて、禿はにっこりと笑って光悦の肩に手を置く。光悦はじつと禿を見た。息づかい、肌の色、心の臓の鼓動、そして体臭。それらは全て、相手の心情の変化を如実に語る。禿の息づかいは平常と変わらない。肌の色も火照っていない。心臓の音は規則正しく、匂いはわずかに甘い香りのまま。汗さえかかず、彼女は緊張も動揺もしていない。

「…………お主はまこと、花魁になれる器量の持ち主だな」

内心光悦は舌を巻いた。この年齢でよくここまで落ち着き払っていられるものだ。わずかの焦りも戸惑いも感じられない。

「興が乗りました?」

光悦はうなずいた。

「いくらだ?」茶代程度で戯れるのはお主の芸事に対する無礼だ。値段を聞こう」

無論、光悦としてもこの禿に手を出したいわけではない。しかし既に彼は禿に手を引かれて座敷に座り、三味線と歌を聞き、酌をされた。彼にとっては禿であっても、れっきとした一人の遊女にもてなされたに等しい。今までの芸事に対して、それ相応の対価を払いたいと光悦は思っていた。しかし、禿はそれを待っていたかのように姿勢を正した。

「…………では。用心棒をしていただきたいのです、お侍様。この廓の一番の花魁『徒桜（あだざくら）』に鬼が憑いております」

「…………鬼、か」

光悦は苦笑した。おそらく悪い虫がついたのだろう。それを鬼と言っているだけだ。

「鬼は雨の夜にやってきては徒桜を襲います。しかし、私どもの太夫はただの遊女とは違い、剣客でもあります」

この日ノ本は千引の岩がわずかにずれた国だ。その隙間から這い出したものが現世で跳梁している。事実、何度も光悦は亡者を斬ってきた。しかし、鬼は未だに斬ったことはない。そして——人も。

「ですが、相手は鬼。並の剣客では太刀打ちできません」

「……それで拙者に白羽の矢が立ったというわけか」

「はい。いかがでしょうか？」

光悦の胡乱な目が畳の上の刀を見てから、再び禿へと移動する。

「……一つ聞きたい。斬ってもよいか？」

「斬る、とは？」

「……殺してよいか」

光悦はその鬼を人だと思っっている。つまり自分が依頼されるのは人斬りだ。御上にどう言い訳をするかは知らないが、ここは吉原だ。淫靡な異界は奉行の追求も及ばない場所と方法があることだろう。

光悦の剣に対する執着がよみがえる。一度でいい。一度、人を斬ってみたい。斬り殺してみたい。それが光悦の切なる願いだった。外刀流を学びながら、活人剣などという偽りに惑わされたくはない。人を斬ることができれば、それは最高の体験になる。病によって歪んだこの剣が、ひとたび輝くのならば、身命を賭す価値がある。

「ふふ、殺せるのならば」

禿が挑戦的に笑った。まだ十代初めとは思えない色香だった。

「……乗った。お前を買おう。今夜の代金は用心棒として拙者を雇うことで払おうか」

「お頼み申します」

禿は頭を下げた。

「……禿、名はなんという。名も知らぬ女を買ったというのも滑稽だ」

「藤、と申します。お侍様は？」

「……志度光悦、と申す」

「光悦様ですね。よいお名前ですこと」

改めて名乗った二人だったが、既に光悦の死んだ魚のように淀んだ目は、藤と名乗った禿を見てはいなかった。

「……では、藤。拙者はお主ではなく殺し合いで楽しもう。鬼といえ

ども、血が出るのなら斬れる」

光悦は、鞘に収まった刀をそつと撫でるのだった。まるで、牙を剥く猟犬をなだめる猟師のように。



「……ということがあり申した。拙者、稽古の合間にこれからあの廓の用心棒を務めます」

夜もさらに更け、待ち合わせ場所に現れた光悦は、石動と勘兵衛に自分のことを告げた。ちなみに甚六は今も白梅のところでお楽しみ中である。

「おいおい……光悦、お前童女が好みだったのか？ 禿に手を出そうたあ数寄者だなあ」

勘兵衛が呆れた声を上げる。

「……月のものが来る前の童女など、興味の埒外ですが」

真顔で光悦はそう答えた。

「……ただの戯れです。拙者が禿を買ったのは、用心棒を務める理由が欲しかった故。これで、大手を振って鬼に刃を向けられるというものの」

光悦にとって禿の藤を買った理由はそれだけでしかない。むしろ彼は、これから始まるであろう殺し合いにこそ昂ぶっている。

暗い情念を見せる光悦に、勘兵衛はぞくりと震えあがった。彼にとって光悦は同門だが、時折見えていて恐ろしくなるのだ。亡者が地獄から這い出して刀を握っているように見える。

「おい光悦」

じつと黙って聞いていた石動が口を開く。相撲取りとがっぷり四つに組めるほどの巨漢がそう言うと、凄みがある。

「……なんでしょうか」

「その廓、莊子楼といったか」

「……はい」

「そこはいわくつきだ。もとより吉原には妖しものが多い。その

廓、妖魔がとりわけ集うところとして祓いを生業とする者たちが目を光らせている。鬼を甘く見るな。俺はお前の葬式には出たくない」

どこもかしこも分厚く、筋肉で覆われた石動はそう言うのと、じつと瘦身の光悦を睨みつける。

「……もとより拙者は死神とは懇意。葬式はおそらく近いでしょう」

「馬鹿者！」

光悦の言葉に石動は手を上げる。サザエのような拳骨で殴られると頭蓋骨が割れそうさだ。

「いいか、お前が死んだら俺がお前の棺桶を担ぐことになるんだぞ！ そんなことになったら俺はお前を冥府から引きずりだして鉄拳制裁してやるからな！」

不器用な親切である。石動が情に厚いことは誰もが知っているゆえ、彼の拳骨に文句を言うものはいない。

「……ご安心下さい。拙者は死にませぬ。少なくとも、あの禿と約束を果たすまでは」

「なんでえ。やっぱりお前え、禿に入れ込んでんじやねえか」

勘兵衛がにやにやと笑った。

「……そういうわけではありませんね」

「ならいいんだけどさ。あんまり入れ込むようなことするんじゃないぜ。俺たちや武士だ。あんまりあっち側の連中ばかり相手にしているとそのうち引きずり込まれるぜ。真つ当に生きろよ」

「……心得ました」

あくまでも静かだが、それでいて斬ることに対する暗い情念を燃やす光悦に、勘兵衛はため息をついた。

「石動の兄い。こいつ、本当に剣については馬鹿みたいに執着しますねえ」

「尚武の気風が強いからなあ。まあ、こいつは根つからの剣術馬鹿ということだ。しかし、こうなったら光悦は止まらんだろう。まあ、死なないうように見張つとくしかあるまい」

「まったくですね」

二人は互いにうなずきながら、のっそりと歩き出した光悦に続くの

だった。



第5話：この鬼を斬る依頼、受けてくれないだろうか



それから一週間後。ようやく雨の降る夜となり、光悦は一人で破れ傘と提灯を手に莊子楼を訪れていた。ぼんやりとした提灯の明かりと、そぼ降る雨の中の光悦は、まさに幽鬼と見まごうばかりの異様な雰囲気であり、すれ違った者はいは妖怪を見るまなざしを向け、あるいは念仏を唱えた。

「……御免。拙者、禿の藤にやとわれ、鬼を斬りに参った」

「ようこそおいでくださいました。私、神田庄吾と申します」

莊子楼の主人は、丁寧な態度で光悦を迎えた。丸顔で愛嬌のあるタヌキのような男である。

「……早速だが、話を聞かせてもらおう。なんでも、この廓に鬼が出るとか」

「ああ。徒桜にですか。あれは、うちの店の問題ですので、奉行所の方々のお手を煩わせるのもどうかと思ひまして……」

「……どうでもよい。その太夫はどこにいる？」

光悦が尋ねると、庄吾は顔を曇らせた。

「実は、あいつもかなりの蓮っ葉で、自分の身は自分で守るって言って部屋に禿の藤と一緒にこもってるんです」

「……それはまた、肝の据わった女郎だな」

「まあね。ただ、その間は客は取らないって言うんで困ってたんですよ。……じゃ、こちらへどうぞ」

庄吾はそう言うと、光悦一人だけを奥の座敷に案内した。

「おい徒桜、お侍様が参ったぞ。客じゃない。藤が雇った用心棒だ。開けてくれ」

庄吾がそう言うと、すつとふすまが開いた。庄吾は目で光悦に合図して、自分はそのくさと戻っていった。光悦は大小を帯から鞘ごと抜くと、紐を解き、だらりと手に持ったままのっそりと中に入っていく。

そこはごく普通の妓楼の座敷だった。ただ、そこにいる太夫だけが異様だ。必要最低限の太夫のいでたちで、細かな装飾はつけていない。おそらく動きやすさを重視するためだろう。手元には凝った装飾の刀が一振り。その大夫は光悦を見て少し笑った。

「そなたが藤の言っていた侍殿か？ 名を志度光悦というそうだな」

「……お主が徒桜か」

「ああ。今は女郎だが、こう見えて元は武家の娘よ。もつとも、妾腹だな」

「……そうか」

光悦はそれだけ言った。

「だが、てて様もかか様も恨んではおらぬ。私はむしろ感謝しておる。おかげでこんな大見世で花魁として暮らせるのだから。それで、何が聞きたい？ 何でも答えよう」

「……禿の話によれば、お主に鬼が憑いているそうだな」

「鬼か。いや、まあ、鬼というか、そうなのだがな」

徒桜はうなずき、話し始めた。

「——あれは、私の兄だ」

「……ほう」

「兄の貞盛（さだもり）は剣には長けていたが、いかんせん神仏への崇敬を持たぬ困った男でな。しかし、とにかく腕は立った」

光悦はわずかに興味を示す。神仏に強い関心はないが、これから斬りあう鬼の腕については知っておきたい。

「……流派は？」

「退捨（たいしや）流だ」

「……相手にとって不足無し」

光悦は昏い表情のままにやりと笑った。シン陰流を学んだ劍豪が編み出した剣術だ。豪快な部分だけが注目されるが、その実極めて実戦的と聞く。

「……それで？ お主は拙者に兄を斬れと申すのか」

「ああ。なにぶん、今の兄は既に彼岸の住人故な」

徒桜は姿勢を整えて話し始める。

「兄はとある社の不帰の森に土足で踏み込んでな。神使である猿を面白半分に斬つたらしい。そこから帰ってから高熱にうなされ、やがて狂死した。天罰覲面とは言うが、無惨な最期だった」

徒桜は顔をしかめるが、光悦はじつと聞くだけで口を挟まない。

「兄の亡骸は荼毘に付した。しかし、兄は未ださ迷っている」

「……死ねなかったのか」

「兄は今わの際まで狂乱していた。恐らく、己が死んだことさえ分からぬのであろう。光悦殿、八丁念仏についてはご存じか？」

「……斬つたものが念仏を唱えつつ、八丁歩いてからようやく事切れたという逸話か」

ぼそりと光悦は、とある名刀のおぞましい逸話を口にする。

「ああ、兄も似たようなものだ」

徒桜は大まじめにうなづく。

「狂乱のうちに死んだのであれば、未だ成仏していないのもうなずける話だ。できれば不肖の兄を私の手で彼岸に送ってやりたい。だが、ここは廓。太夫が三味線も弾かずに抜き身をぶら下げていては沽券にかかわる。それに、藤たち禿にも迷惑がかかる。やはり手練れを雇わねば……」と思っていた時に、そなたの話が舞い込んできたわけだ」

そこまで言うと、徒桜は改めて光悦に頭を下げる。

「身内の恥をさらすようで情けないが、この鬼を斬る依頼、受けてくれないだろうか」

美しい花魁に伏して願われても、光悦はさしたる感慨も抱くことなく、静かにうなずいた。

「……承知。もとより拙者は禿の藤をすでに買っておる。この劍の腕で代金を支払わねば」

真顔でそう言った光悦に対し、徒桜は言葉を探すように目を泳がせる。

「……え？ 藤をか？ それは、何とも……奇特な」

「……安心しろ。手は出しておらぬ」

「そ、そうか。それはよかった」

徒桜は明らかにほっとした様子を見せた。一方で光悦は聞きたい

ことだけを聞いて満足し、そのまま座敷の隅で鞘を抱いて座りこんだ。

こうしていると、まるで死体が転がっているかのような不気味な姿だ。もとより肺病を病み死に近い彼にとって、亡霊など隣人のようなものである。そんな光悦に、前回会って相手をした禿の藤が恐れる様子もなく近づく。

「……藤か」

「先日はご贔屓いただきありがとうございます」

藤はそう言つて、馴染みの客のような親しげな様子で頭を下げた。

「……物怖じしないな、お前は」

「いろいろと慣れておりますので」

相変わらず、藤の態度は子供とは思えない落ち着いたものだった。つい、光悦は彼女の身の上を聞こうとした時だった。室内だというのに、鳥肌が立つよううすら寒い風が吹く。

「……来たか」

にたり、と光悦が笑つた。屍肉をついばむカラスの如き笑みだ。

「……藤、下がっておれ」

光悦がそう言うと、藤はうなずいて彼から遠ざかる。ふすまが開き、廊下に一人の男が立っていた。あばらが浮き出るほどにやせ細つた男だ。土気色の肌はどう見ても死人のそれだ。らんらんと輝く両眼と、床に引きずるようにして片手に持った一刀を見れば、誰もが彼から遠ざかることだろう。

「未だ迷われたままか、兄上」

徒桜がため息をつく。

なるほど。こんな気色悪い亡霊が現れるようでは、廓も困るわけだ。客が興ざめどころか悲鳴を上げて逃げ出す。

「ああ……熱い……熱いぞ……。血が煮えたぎるようじゃ……おい、八雲」

男の片目がぎよろりと動き、徒桜を見る。彼女の名前は八雲というらしい。

「兄上、どうぞお帰り下さい。もう兄上がいるべき場所は、この現世で

はありませぬ」

徒桜は正座してはつきりと兄の亡霊に告げる。しかし、貞盛には文字通り馬耳東風だったようだ。まるで聞いていない様子で、彼は顔を怒りで歪める。

「なんだそのふしだらな格好は。まるで遊女ではないか。貴様、家名に泥を塗る気か。この親不孝者が！」

貞盛の言動は完全に狂人そのものである。目の前の妹が花魁である意味が理解できないらしい。

「兄上のお叱りは甘んじて受ける所存です。しかし、今の私は吉原で生きる身ですが、そこに恥も迷いもありませぬ。これもまた、女の生きる道です」

「黙れ！ お前が商売女でいる姿など俺には見るに堪えんわ！ そこになおれ、叩き斬ってくれる！」

「兄上、どうかお鎮まりください」

徒桜は兄を諫めるが、彼は聞く耳を持たない。

貞盛は血走った目を見開き、怒りなのか高熱なのか分からない震える手で刀を抜き放つ。齒をカチカチ鳴らしながら徒桜に刀を振り上げた彼と徒桜の間に、ぬっと割って入った者がいた。光悦だ。

「……斬る相手を間違えているぞ、退捨流」

「退けい！ 俺は不出来な妹を折檻せねばご先祖に申し訳が立たぬ！」

「……そうもいかぬ」

まともに狂人の殺意を浴びてなお、光悦は陰鬱な気配を消さない。背をややかがめ、酔漢のような足取りですり寄る。その手がゆっくりと刀を抜く。怒りに任せて激しく抜いた貞盛とは正反対の、ずるずると蛇が這うように遅い抜刀。ただし——脇差だ。

「なんじゃ貴様は！ ふざけた真似を……！」

「……真剣勝負は初めてか？」

「なに？」

「……ならば、拙者の流儀に付き合ってもらおう」

光悦はそのまま、滑るように間合いを詰めた。まるで倒れこむよう

な異様な動き。そのくせ、殺意をはつきりと込めた刀身が体に隠れるようにして中段から襲いかかる。

「むうん！」

貞盛が刀を下段から振り上げる。狂っても退捨流の達人。その刀には躊躇も容赦もない。

火花が散った。弾かれた勢いで光悦の状態が泳いだ。まるで酔いどれがふらついているかのような動きで、はた目から見ればてんで剣術を学んでいない素人にしか見えない。だが、踏み込んだ貞盛の足元をじろりと光悦が片目で見えた。手の中で脇差しが回り、逆手に握られると足の甲を狙って振り下ろされる。貞盛の足を畳に縫い付けられるもりだ。

それに気づいた貞盛が横に跳んだ。振り下ろされた光悦の刀が畳だけを貫く。真横に薙ぐ貞盛の一刀。そのままだと瓜のように頭を真横に両断される一撃。けれども躊躇せずに光悦は体を倒し、畳の上に転ぶ。明らかに慣れた動きだ。彼の頭の上を貞盛の刃が通り過ぎる。光悦はすぐさま上体を起こし、脇差の切っ先を貞盛の腹に突き入れた。



第6話：初めて刀を持つ手が震えた



「があっ!？」

苦悶の声を上げながらも、貞盛は突き入れられた刀身を足で蹴り上げようとした。臓物を抉ろうとする光悦はそのまま手を離し、ずりりと滑るようにして間合いを離す。苛立たし気に貞盛は腹に刺さった脇差を抜くと、そのまま床に突き刺した。

「浪人風情が……! なまくら包丁を振り回しているつもりか!」

罵声を浴びせられても、光悦は陰惨な光をたたえた目で貞盛を見るだけだった。彼の剣術は華やかな御前試合や活人剣とは無縁の、戦場にて磨かれた外刀流である。重たい甲冑を着ることを想定した緩やかな動きの「陽」と、病人や盲人を装ったふらついてよろけるような動きを特徴とする「陰」を自在に使い分ける。およそまともな剣術ではない。

光悦の目は、じつと貞盛の腹の傷を見ている。出血多量を狙うには浅い。失血により朦朧となるには時間がかかるだろう。そもそも亡者の貞盛が、血を失って死ぬかどうかは分からない。痛し痒しといったところだ。室内で振るうには脇差は刀身の短さが有利となるが、逆に短い故に肝を裂くには至らなかつた。じろりと光悦の目が畳の上の刀を見る。

その瞬間を貞盛が逃すはずがない。

「いえああああっ!」

猿が叫ぶが如き気合いと共に突進して刀を振り下ろす。得物を光悦に握らせる気はない。刀に注意が行かざるを得ない光悦の次の動きは、手練れの貞盛にとっては手に取るように分かるのだろう。しかし焦ることなく、無手のまま光悦は貞盛の振るう刀を紙一重で避ける。

白銀の閃光が弧を描く。それにまわりつくかのように光悦は避

けるだけでなく、逆に間合いを詰めるかのように歩を進める。本能に逆らう異様な動きだ。常人ならば、一撃で骨まで断たれる刀身から少しでも逃れようと後ずさるはずだ。だが光悦は逆に近づく。恐怖を感じないかのように。梁や柱を盾にして、貞盛の刀を防ごうとするのか。

「侮ったなあっ！」

しかし、だからこそ貞盛は目を見開いた。一瞬だけその顔が狂人から武人に変わる。まるで光悦の動きに我慢の限界を迎えたかのように、大きく袈裟懸けに刀を振り下ろそうとする。室内でそうすれば、当然刀身が壁に当たった。だが、凄まじい気合いと共に振られたその刃は、壁を乾いた泥のように割りながら光悦に迫る。

壁や柱が邪魔をするならば、それを叩き割る気炎をもって刀を振るえばよい。逆にそれらを盾と踏んだ相手はまさかの動きに隙を見せる。そのはずだった。光悦は驚くことなくわずかに息を吐いた。その片脚が持ち上がり、指が畳に突き刺さった脇差の柄を握った。空を裂くよりも、壁を割る時の方がわずかに速度は落ちる。それだけでよかったのだ。

初めて光悦は後ろに跳んだ。片脚の膂力だけで全身を後方にやり、怒り狂った貞盛の必殺の一撃から逃れる。ふすまが彼の五体を受け止めて派手に破れる。器用と言うより昆虫のような動きで、光悦は右足の指で掴んだ脇差を手で持ち、貞盛に向かって投擲する。喉元に迫るそれを貞盛が刀で弾いた時——光悦は畳の上にあった刀を手にと取っていた。

五分と五分。誰もがそう思う状況と間合いだ。光悦が静かに刀を抜いた。一瞬一瞬が命を削るような死闘でありながら、光悦は死人のように落ち着いている。壁に寄りかかるようにして、光悦は刀を下段に構えた。座頭が杖で目の前を探るような奇妙な体勢だ。

「なんだ、その動きは。気でも触れたか」

「……参る」

ずるり、と今度は光悦から動いた。

躊躇なく間合いに飛び込む。その切っ先が狙うのはやはり貞盛の

脚。甲冑を着ている相手も想定する外刀流だ。堅固な鎧に覆われた胴ではなく脚、それも太い血管が通っている箇所を執拗に斬ろうとする。それを貞盛の刀がことごとく弾く。なおも光悦は貞盛を追い詰めていく。弱った獣に群がる野犬のような、執念深い小刻みの攻撃だ。

大振りの動きなど一つもない、じわじわと相手の命を啄むこの異質な立ち会いこそ、外刀流の真骨頂だ。

「いええい!!」

貞盛が刀を振り上げる。大上段からの一撃。一撃一撃が目眩ましも小手先でもない、人体を破壊する退捨流の体現だ。しかし、光悦の動きは異様だった。兜さえも両断する一撃を刀で受け止めると同時に、その手を離れたのだ。

「なっ!」

手首をひねり、肩の柔軟な関節のしなりを活かしたその動きは、まるで貞盛の刀を自分の刀で絡めとるかのようだった。自然と振り下ろした体勢で地に引かれるようになった貞盛と、刀を離して身軽になった光悦との違いが現れる。光悦の右手が握られた。人差し指の関節を曲げて突き出すようなその握りは、大陸の拳法に通じるものがある。

斜め横から、貞盛の喉笛に光悦の指が突き刺さった。

「ぐっおっ!」

気道が潰れる嫌な音と、貞盛の呻き声。苦痛に顔を歪めつつ、貞盛は刀をもう一度振り上げた。光悦の胴体を叩き割らんと力任せに逆袈裟を放つ。

「おおおっ!!」

貞盛の一撃を光悦は一步だけ退いて避けた。体を捻ると、左手で貞盛の右腕を掴む。

そのまま、ぐいと腕を寄せた。右手が蛇のように這うと、貞盛の腰の脇差を抜いた。まるで抱き締めるかのように体を密着させながら、光悦は壁に貞盛を叩きつけた。その勢いで、心の臓へと脇差を深々と突き刺す。痴情のもつれから刃傷沙汰になった者同士のような、あま

りにも泥臭く洗練とは程遠い殺し合いだ。

貞盛が光悦を押しつけようと体重をかける。だが、光悦はびくともしない。じつと、光悦は貞盛の顔を見る。笑いも怯えもせず、ただ昆虫のような目で光悦は貞盛を見つめる。その生死の足掻きをすべて見届けようとしているかのように。怒りと苦痛で、まさに鬼のように歪んだ貞盛の顔がさらに歪んだ。口を開くと同時に、血が口から噴き出した。

「俺の名を……聞け」

「……聞こう」

「退捨流……茂野貞盛。覚えて……おけ」

「……あい分かった」

ぎりぎりど歯噛みをしつつ、口の端から血の泡を吹きながら、ゆっくりと貞盛の体から力が抜けていった。ずるりと貞盛の体が壁から離れ、畳の上に倒れる。光悦は貞盛の死体をじつと見下ろしていた。

「兄上……」

徒桜がそつと兄の体に触れた。

「……もう一度と、迷われませぬように」

彼女は静かに嗚咽を漏らし始めた。神仏に対する敬意を持ち合わせず、戯れに神使の猿を斬ったことで狂い死にした男、貞盛。自分が死んだことさえ分からず、こうしていまだに迷っていた。確かに因果応報であり、天罰覲面と言えそうだが、あまりにもその姿は哀れだった。

光悦は身をかがめると自分の大小を拾い上げ、抜いた時と同じくゆつくりと鞆に納める。

「……死闘を味わったのだ。今度こそお主の兄上は、自分が死んだことを理解しただろう」

光悦は徒桜にそう告げる。その言葉に安心したのか、泣き崩れる彼女の姿に何も感じないほど、光悦の心は冷え切っていない。彼は部屋の隅にうずくまると息をついた。

ゆつくりと貞盛の姿は薄れて消えていく。部屋に満ちていた血の臭いも薄れていく。光悦は刀から手を離し、自分の手を見た。貞盛の

心臓を突いて血に染まった手も元に戻っていく。その手はわずかに震えていた。

「……藤」

それまで死闘が繰り広げられていたにもかかわらず、平然とした様子の藤が光悦に近づき、正座して向かい合わせに座る。

「はい」

「お主を買った代金、鬼を斬って払い申した。これで文句はないな？」
「ありがとうございます」

藤はそう言つて深々と礼をする。

「鬼とはいえ、人を斬った心持ちはいかがですか？」

しかし、頭を上げた藤は相変わらず、年端もいかない少女とはとても思えない落ち着いた声でそう言った。

「……外刀流を学んで早幾年。初めて刀を持つ手が震えた」

「まあ。恐ろしかったのですね」

「……人斬り包丁などと呼ばれようが、刀に違いはない。拙者は刀を抜くべき時に抜いた。ただそれのみ」

「ご自分にそう言い聞かせておりますね」

ぶしつけともとれる藤の言葉に、徒桜が顔を上げた。涙をぬぐいつつ慌てて弁解する。

「おい藤、いくら何でも言いすぎだぞ。すまぬな、光悦殿。この禿は少々変わり者でな」

「……構わぬ。修羅道ははまだ遠いようだ。これにて御免」

光悦は刀を手にぶら下げ、部屋を後にしようとする。

「また、来てくださいますか？」

藤がそう言う。

「……お主が客を取る前にまた参ろう」

「楽しみにしております」

光悦はその言葉に答えず、そのまま部屋を出て行った。それ以後、もはや徒桜の兄の亡霊は二度と現れることはなかった。



第7話：ある夜たちの悪い盗人たちが押し入ってねえ、あの子以外みんなお陀仏さ



「莊子楼の藤って禿かい？ ああ、知ってるよ」

後日。夜の吉原の一角。蕎麦を売る屋台に光悦はいた。屋台の店主は彼に葱と山葵の入った小皿を差し出す。

「物狂いか狐憑きかって言われてたから有名だよ。元は大店のご息女で蝶よ花よと育てられてたらしいんだが、ある夜たちの悪い盗人たちが押し入ってねえ、あの子以外みんなお陀仏さ」

屋台の店主は顔をしかめる。口さがない男だが、その声は確かに彼女に同情する響きがあった。

「あの子を見つけた岡っ引きの話によると、あの子は首のない母親の死体の前に座って、まるで母親が死んだことに気づいてないみたいになにこにこ笑ってたんだって。気味悪がられて当然ってもんだよ」

「……痴れたか」

光悦はそう呟きつつ蕎麦をすすする。

「そりゃあ、目の前でおとうとおつかあが殺されたのを見たんじや、物狂いになっちゃったほうが幸せだったかもしれないよ。……でもね、その娘があんまり可哀想だったんで、誰かが連れ出してやったのさ。それで、今は吉原の廓の中で働いてるって寸法さ。最初は見世物にして客の同情を引こうって感じだったらしいんだがね」

屋台の店主は平然と恐ろしいことを口にする。しかし、同時にこれはどんな手段であっても、身一つで稼ぐ道でもあった。

「ところがどっこい、藤は物覚えがいいし器量もよくてねえ、たちまちもったいねえってんで今は莊子楼の禿さ。狂ってるからか変に肝が据わっててねえ」

藤の天真爛漫さは、彼女の美德ではなく心が壊れているからだだった

のだ。

「どんな奴にも物怖じしないで話しかけてくるから、皆もだんだんあの子のことが可愛くなってきたのさ。太夫たちも『あたかも犬畜生みたいに扱われてきたけど、藤はもつと可哀そうだったんだねえ』なんて言つて、芸事や三味線も教えてやってんのさ。将来の稼ぎ頭だね」
「……なるほど」

光悦は短く答えると、汁を一口すすする。

「もうじき十三になるはずさ。……おつと、すまんね。そろそろ行かないと」

屋台の店主は店仕舞いの準備を始めた。最初に店の看板を照らす印紙を畳んで光を消す。天海僧正が広めたこの印紙は、日ノ本で一般に使われる神秘を用いる技術だ。彼の僧侶は剃髪せず、阿蘭陀や葡萄牙とも違う異国の顔立ちで耳朶は鋭く尖っていたとか。

「……勘定だ」

「へいまいど」

銭を受け取った店主は続いて碗と箸を受け取る。

「……それと、一つ聞きたいことがある」

「なんででしょう?」

「……藤の家に押し入った盗人どもについて、知っていることはあるか?」

ぞくり、と店主は体を震わせた。それまで胡乱な雰囲気だった光悦の方角から、黄泉に吹くかのような殺気が漂ってきたからだ。

「……さ、さあ。でも、岡つ引きの話によると、ありやあ黒百足党の連中じゃないかって目星がついてるそうですぜ。お奉行様も手を焼いてるそうで」

「……そうか」

それだけ言うと、光悦はきびすを返し、吉原の人ごみの中に消えていった。

(なんだってんだ……)

冷や汗を拭いながら、屋台の店主は心の中で眩くのだった。



黒百足党の頭目、四ツ目の弥五郎がこの盗人の集団を率いてから数年になる。主な面々は五人で、その下に必要に応じて雇う子分が何人かいる。彼の額にある焼け爛れた傷跡は、育ての母親に焼け火箸でつけられたものだ。それが原因で、弥五郎は無類の女嫌いである有名だった。だがそれ以上に、彼は残忍な盗人として裏街道で知られている。

世間では残忍で冷酷、人殺しが三度の飯より好きな連中とされているが、弥五郎はそれを楽しみつつも特別人殺しに溺れてはいなかった。単に、生かすよりも殺す方が楽だからだ。江戸にいくつかある隠れ家に五人が集まり、次の計画を立てている時「それ」はやってきた。外の見張りが、金を数えていた二人が、気付いた一人が、順に殺されていく。



「おい、入って来いよ。いきなりブスリと矢が飛んでくることはないぜ。話でもしようじゃないか」

弥五郎が部屋の奥でそう言うと、ゆっくりとふすまが開いた。むせるような血の臭いがする。こちらに向かって転がってきた生首を見て、弥五郎は鼻で笑った。

「おうおう、首だけになっちまったなあ、源次。肩こりとは永久におさらばだな。はははっ」

ふすまを開けてのっそりと入ってきたのは、血まみれの侍だった。まるで幽鬼のような男だ。生気がまるでない。行き倒れが歩いているかのような、枯れ木が立てかけてあるかのような不気味さだ。一刀だけを手にぶら下げていたが、のろのろとした動きで鞘に納めた。志度光悦だ。

「残りの三人はどうしたんだよ」

仲間の無惨な姿を見てもあくび交じりにそう言う弥五郎に対し、光悦は何の感情もない声音で告げた。

「……冥土の入り口でお主を待っている」

「ははっ、そんな仲じゃねえよ。あいつら、さっさと先に行ってるぞ。何しろあの世に金は持っていけねえからなあ」

弥五郎は下卑た笑いを浮かべて、手にした徳利と猪口をちらつかせた。

「まあ飲め。毒なんか入ってねえよ、ほら」

「……いらぬ」

徳利から濁り酒を注いで飲む弥五郎だが、光悦は首を左右に振った。

「で、俺を捕まえて岡っ引きに引き渡す気か？ それとも聞くと涙語るも涙の仇討ちってか？ どっちなんだよ？」

「……数年前に、お前は大店を襲って一家を皆殺しにしたそうだな」

光悦が言うと、弥五郎は額に手をやった。

「待て、思い出す……」

しかしすぐに、あっけらかんとした顔で彼は首を左右に振った。

「だめだ、忘れた。いちいち殺した奴のことや盗んだものことなんて覚えてねえよ」

「……そうか。致し方ない」

すぐに興味がなさそうに打ち切った光悦を見て、弥五郎は大げさにため息をついた。こんな不気味な男は初めて見る手合いだ。

「まったく、なんだよおめえは。死人みたいな奴だな。少しも恨みも怒りも伝わってこねえ。誰かに雇われたか？ だったらどうだ。俺に雇われてみるのはどうだ？」

「……なに？」

「この隠れ家にいたのは手練れの四人だ。木刀振り回して武士道なんて言ってる連中と違って、殺しだって何度もやってきたんだ」

弥五郎はかつての仲間の生首を脚で蹴る。

「そいつらを一人でやるなんて、お前なかなかやるじゃねえか。俺の用心棒になれよ。いくらでも人が斬れるぜ？ 斬りたいんだろ？」



第8話……………ならば、今ここで死ぬ



自分を殺しに来た光悦に対し、平然と仲間になるように弥五郎は吹っ掛ける。没義道どころか鬼畜の所業をしてきた男だ。仁義もなければ道理もない。ただ使えそうな相手には金と欲をちらつかせるだけだ。

「…………報酬はなんだ？」

そのふてぶてしさに感じ入るでも嫌悪するでもなく、光悦は尋ねる。

「俺をいつでも斬っていいぜ？ やれるのならなあ」

「…………恐れを知らぬ悪党だな、お主は」

「どうせお天道様の下は歩けねえ。捕まればきつい仕置きの本に石を投げられながら磔獄門だろうさ。だったら好き放題やって、面白おかしく生きるしかねえだろ」

元より弥五郎に長生きする気はないが、かといって捕まる気もない。刹那的な生き様を聞いて、光悦はわずかに眉をひそめた。わずかに一步を踏み出す。室内でもその足は草履だ。

「…………ならば、今ここで死ぬ」

「ひやははっ！ そうこなくっちゃなあ！」

弥五郎は嘲笑と共に、手に持っていた猪口を彼の額めがけて投げつけた。

避けるか受け止めるはずだ、と弥五郎は確信していた。額を切って血が目に入るのは嫌に決まっている。しかし光悦は避けなかった。猪口がぶつかって額が切れ、血が垂れる。

「——ちいっ！」

猿のように飛びのく弥五郎。彼がさつきまでいた場所を、光悦の居合の一閃が通り過ぎた。一瞬でも遅れていたら、間違いなく胴と首が泣き別れになっていた。

その代わり頬がぎつくりと斬られた。血が噴き出る。

「いつってえなっ！」

痛みと斬られたという事実逆上し、弥五郎は腰の刀を抜いた。鞘こそ偽装でぼろぼろだが、中身は武家の家から盗んできた名刀だ。手近にあった金の入った袋に手をつ込み、目眩ましでびた錢をばらまきつつ弥五郎は斬りかかった。刀で受けた瞬間、光悦の体が倒れた。「なっ!？」

あり得ない異様な動きだ。わざとこちらによろけるようにして倒れかかってくる。その意味を理解し、弥五郎はもつれそうになるのをぎりぎり避けた。獲物に襲い掛かる蛇のように迫ってくる光悦の左手から、かろうじて逃れる。捕まったら喉笛を指で引きちぎられただろう。

「な、何だお前。まっとうな侍の剣じゃねえな」

ゆらり、と身を起こした光悦は、何事もなかったかのように立ち上がる。そして、右手で抜き放ったままの刀を盲人の杖のように下段に構える。

「……外刀流、志度光悦」

「おうおう、名乗りかよ。俺あ四ツ目の弥五郎ってんだ」

口ではそう言いつつも、じりじりと弥五郎は壁際に移動した。頬から滴る血が苛々させる。

まったくもって油断がならない相手だ。正々堂々と斬りあうのではなく、相手を幻惑して殺すことに忠実すぎる剣だ。ふらふらと的を絞らせず、打ち込めば引き、突けばよろけ、そして絡みつくようにして殺す。

「お前は俺を斬りたいらしいが、俺はお前とやりあう気はねえぜ。逃げることでできるんだぞ。盗人をこの暗闇で追えるかよ、おい」
弥五郎はあざ笑う。殺し合いならば相手に分があるだろうが、何も正面きって刀を振り回す必要なんてどこにもない。さっさと逃げればそれで終わりだ。外は雨のそぼ降る暗闇。盗人の弥五郎ならば明かりなど何もなくても闇夜を昼間のように駆けることができる。
「……逃げてもよいぞ」

「そうかよー」

妙なことを言うな、と思いつつも弥五郎は障子に体当たりした。向こうは廊下だ。後はそこを走って逃げて外に出れば一息つける。背後に警戒しつつ、転がった身を起こして走り出そうとして——不自然に足がもつれた。

「……あ？」

心臓に激しい痛みが走った。足がふらつく。口の中が妙に乾いて、舌が痙攣して張り付く。ろれつが回らない。

「て、てめえ——さっきの刀に毒を塗ったな!？」

弥五郎は吠えたが、もはやどうしようもない。胸を押さえながらその場に膝をつくしかなかった。

「……薄皮一枚、切れればよし」

光悦は静かに歩み寄ってきた。まるで道端でもがく蟬でも見つめるような目がまた恐ろしい。

「このクソ野郎！ 侍の風上にも置けねえなあ！」

弥五郎はせめてもの抵抗とばかりに暴れようとするが、手足が突っ張り始めた。思えば最初からおかしかった。抜き身をぶら下げているのに、わざわざ鞘に納めたのがおかしい。交渉の余地なく斬りかかる気が満々なのに、いったん納刀するあの動作。恐らく鞘に仕込んだ猛毒を刀身に塗り付けていたんだろう。最初から毒殺が目的だったのだ。

痙攣が始まった弥五郎から少し離れた場所に、光悦は座り込んだ。刀を手に持ったまま、死ぬのをただじつと見ている。

「くそ、さっさと殺せよ！ あ、いててつ！ 痛え！」

心臓が脈動するたびに全身が痛む。それでも光悦は目をそらさない。

「……なぜ殺した」

「あ？」

「……お前が惨殺した夫婦には幼い娘がいた。殺さずともよかったはずだ」

「知らねえよ。顔を見られたんだろ、きつと」

「……それだけで命を奪うのか」

「俺たちみたいな極悪人になるとな、一人殺すのも十人殺すのも同じなんだよ。言っておくが、殺しも盗みもしたがそれ以上はしてねえよ。……女は嫌いだ。顔も見たくねえ」

それは弥五郎の誰も知らない過去だ。自分を虐げる母親を殺し、彼は悪党の道をひた走ってきた。

「……そうか」

「なあ頼むよ、殺してくれ。ああくそっ」

這いずってでも近づこうとした弥五郎に、光悦はのっそりと立ち上がると脇差に手をかけた。

「……口を開けて動くな」

「お、武士の情けって奴か？」

「……否」

瞬間、光悦の右手が目にもとまらぬ速さで動くと、弥五郎の口内に脇差が投げつけられた。

それは一撃で延髄を貫き、弥五郎の目がぐると上を向いた。光悦はじつと耳を澄ませて、弥五郎の呼吸と心臓の音が止まったのを確認する。やがて、本当に弥五郎が死んだことを確認すると、光悦は隣の部屋から大工仕事に使うノコギリを持ってきた。しばらくの間、ゴリゴリという音はその部屋からしたが、やがて聞こえなくなった。



第9話：とと様……かか様……



早朝。吉原の入り口の門に、五つの生首がぶら下げられていた。いずれも人相書きが出回っている黒百足党の盗人であり、捕まれば磔獄門間違いなしの札付きである。生首はかつと目を見開き、死ぬ寸前の恐怖を顔中に刻み込んでいた。

「うわ、ひでえ」

「おいおい、まるで戦国じゃねえか」

「なんだよ、誰がこんなひどいことを……」

その光景を見て、吉原の住人は顔をしかめる。しかし同時に……。

「まあ、こいつらは自業自得だなあ」

「そうそう。因果応報、天網恢恢疎にして漏らさずって奴よ」

「まったく、ろくでもないことしかしてたんだから、ようやく罰が当たったのさ」

そう言いつつ、皆は内心で快哉を叫んでもいた。

その五つの生首の前には、立札があり紙が貼り付けられている。そこにはこう書かれていた。

『この者たち、無辜の民を襲いし咎により、斬首の上晒し首とする。藤の木を手折った罪の応報なり』

その立札を見た岡っ引きは呟いた。

「どこの誰だか知らねえが、あの禿の藤の親御さんの仇討ちをしたみてえだな」

本当はこういうのは誉めちゃいけないのだがな、と岡っ引きは内心思いつつ、それでもなんだかんだ理由をつけて首と立札を片付けるのをぎりぎりまで遅らせるのだった。その首を目にしたものがある。藤だった。彼女はじつと、あの物怖じしない目で五つの生首を順番に見、そして立札を穴のあくほど見つめた。彼女の目から、ポロリと涙がこぼれた。

「とと様……かか様……」

彼女は眩くと、小さな手をそつと合わせ、父母の冥福を祈るのだった。今はもう、彼女を物狂いと呼ぶ者はいない。しかし、藤の心はあの日以来壊れたままだ。決して治ることはない。それでも、この瞬間だけ、彼女は年相応の少女だった。たとえ、それが一刻後には自らも忘れ、一人の風変わりな禿に戻ってしまおうとしても。



外刀流の道場で、光悦は黙々と刀を一人振るっていた。木刀の素振りをやめ、彼は真剣を手取る。居合の鍛錬だ。外刀流の構えに多い、姿勢を低くして這うような体勢を取る。わずかな気合いと共に抜刀。抜いて、斬る。鞘に納め、再び抜いて斬る。その繰り返した。人を殺すのに複雑な型や凝った動きなど必要ないと言わんばかりの単純な動き。

淡々と憑かれたように同じ動きを光悦は繰り返す。それを遠目に見ていたのは、師匠の長谷川正忠だった。

「……ううむ」

白い髭に手を当て、正忠は唸った。それまで門下生に稽古をつけていた彼は、そばに立つ巨漢に言う。

「有馬」

「はい、何でしょうか」

塗り壁とも呼ばれる相撲取りのような巨漢、石動有馬は、かしこまって正忠に一礼する。

「後はお前に任せる」

そう言うと、正忠は木刀を置き光悦の方へと歩いて行った。その背にもう一度一礼し、石動は破顔すると木刀を手を取った。自然と門下生たちは後ろに下がる。石動は乱暴ではない。言動は厳しくも優しい。だがいかんせん凄まじい怪力なのだ。墓石を振り回したという逸話さえある。そんな彼と立ち会うのは恐怖でしかない。

「よし、いぐぞ」

だが、それを知っていてあえて石動は明るく笑いながら、のしのしと道場の床を踏みしめて近づく。

「俺は師範よりも不器用だからな。許せ」

遠くでその様子を見た勘兵衛と甚六がため息をつく。

「ありやあ連中がかわいそうだな。今日はしごかれるぜ」

「石動の兄いはああ見えて容赦がねえからな。おお、笑えねえぜ」

門下生の稽古を石動に任せた正忠は、道場の隅で黙々と抜刀を繰り返す光悦に近づいた。

「光悦、精が出るな」

「……お師匠様」

見るからに不健康な痩身でありながら、粘つくような生気をまとった光悦は、師を前にして礼儀正しく刀を納める。だらりと汗に濡れた黒髪が垂れる。

「……お見苦しいものをお見せしました」

「いや、よい」

正忠は既に老境に入った身でありながら、若者のようにしっかりと背筋を伸ばし、光悦を見据える。

「抜け。儂が見る」

「……はい」

師の猛禽のような目に睨まれつつ、光悦は静かに構えた。わずかな気合いの後、刀が鞘から閃光となってほとぼしり出る。腰は据わりつつも柔軟。動きに無駄はなく気迫も充分だ。

「もう一度だ」

「……はい」

それを三度繰り返す。光悦は何一つ疑問に思う様子もなく忠実に正忠に従った。師は絶対である。肺病を病んだ光悦を、これまで正忠は他の弟子たちと何一つ変わらず扱ってきた。鼻屑せず、同情せず、一人の男児として厳しく指導してきた。それが光悦にはありがたかった。やがて、正忠は短くこう告げる。

「少し話すことがある。場所を移すぞ」



第10話：そこまでして刀の道を極めたかったのか？

返答次第によつては、儂にも考えがある



光悦が正忠の後に続いてたどり着いたのは、正忠の部屋だった。上座で正座する正忠の前に光悦は平伏する。刀掛けには正忠の愛用する名刀がかけられているのを、光悦はちらりと目にした。

「活人剣など言葉の綾、偽りであるとお前は言っていたな」

唐突に正忠は追及する。理由は分からない。しかし、「なぜ？」と光悦は問うことはしない。

「……拙者は生き恥を恥と思わず、忍び難きを忍ぶ外刀流の徒故」

外刀流は合戦の狂乱の中で生まれた外道の剣術だ。心魂の鍛錬にあらず。ただ敵を殺して生き延びるための術策こそが外刀流の基根。それをひたすら光悦は求めてきた。誰かを活かすためではない。自らが生き延びるため。

「ならば、その心得が活人剣である、とは思わぬのか」

光悦は黙する。活人剣をことさらに標榜する輩は、刀は人を守るためにあると説く。光悦はそう思うことができなかつた。刀は殺すためにある。ならばなぜ殺すと問われれば、自らが生き延びるためと返答しよう。それこそが活人剣であると正忠は説くのだろうか。

「……自らの浅慮、汗顔の至りでございます」

そう言う光悦を正忠は一喝する。「男児たるもの、己の主義をたやすく曲げるな。なぜおまえは世間の言うところの活人剣に対して異を唱える？」

正忠の問いに、光悦は目を上げる。死人の目と大差ない淀んだ目に、狂おしい光がわずかに灯った。追い詰められたけだものの目に宿る光だ。

「……己の思うところを申し上げてよろしいでしょうか？」

「よい。言え」

珍しく、本当に珍しいことに光悦はわずかにためらった。しかし、それでも絞り出すようにして言葉を口にした。

「……もし本当に人を活かす剣があるとするとするならば——拙者の病は、なぜ癒えぬのでしょうか？」

それは、光悦が初めて吐露した本音と言っているいいものだった。初めて、彼は自らの業病を呪い、壮健な他者を羨む言葉を口にした。

「……口惜しいのです。生きることさえままならず、病に朽ち果てるであろう我が身が。憎いのです。酒色を貪りつつ平然と達者に生きる者たちが。なぜ、とってしまおうのです」

それまで光悦は、従容と死病を受け入れているように見えた。武人として潔く死に臨んでいると。だが、彼も人の子だった。生きたいと願い、生を浪費する輩を嫌悪する。

「……己さえも救えぬ未熟者が拙者です。剣によって人を活かすなど、夢のまた夢かと。故に刀の真髄は、殺人にこそあると拙者は思うのです」

呻くような彼の告白を、正忠はじっと聞いていた。怒るわけでもなく、哀れむわけでもない。その後彼は、有無を言わさぬ口調で言った。「——それが、黒百足党の悪党を晒し首にした理由か」

光悦の呼吸が止まった。正忠は知っていたのか。なぜ露見したのかは分からない。けれどもそれは事実だ。自分は人を雇って黒百足党の隠れ家を見つけ出し、そこで五人を殺し、首を吉原の入り口に晒した。あの五人が藤の両親を殺した盗人であると知ったからには、生かしてはおけなかった。しかし彼は言い訳せずただ平伏した。

「……お許しください」

「偽りは申さぬのだな」

「……師を偽るなど、弟子としてあつてはなりません故」

それにしても、なぜ正忠は分かったのだろうか。それが不思議だった光悦は質問する。

「……なぜ、お分かりに？」

即座に一喝が飛んできた。

「儂を甘く見るな！ お前の太刀筋が変わったことなど一目見れば分かる。あれは人を斬った後のものだ」

「……重ねて、お許しください」

光悦の身体が震えた。それは確かに自分が望んだ境地だ。だが同時に——恐ろしくもあった。正忠の体が殺気を帯びる。粘つく泥のような光悦の殺気とは違い、凍てつく氷雪のような鋭利な殺気だ。

「なぜそんなことをした。そこまでして刀の道を極めたかったのか？

返答次第によっては、儂にも考えがある」

正忠の声には怒りがあつた。それもそのはずだ、と光悦は思う。もし自分が殺人に魅入られているのならば、正忠は師として成敗する務めがある。老若男女を戯れに斬る辻斬りになり果てる前に、義によって正忠は光悦を斬るだろう。一命を師の判断に委ね、光悦は人を斬つた理由を説明することにした。

「……仇討ち、でした」

「なに？」

光悦は包み隠さず話した。吉原で藤と言う頭のおかしい禿と知り合いになったこと。彼女が物狂いになった理由は、家族を惨殺されたからだということ。その下手人こそがおそらく黒百足党の盗人であること。だからこそ、自分は仇討ちとしてあの五人を晒し首にしたという事実を。最後まで聞いた正忠は、怒るどころか呆れた声を上げた。

「まったく、何ということをしてかしたのだ。悪党の隠れ家を見つけたのなら、火付盗賊改を呼ぶのが筋というものだ。万が一悪党どもに負けて、血祭りにあげられたならどうする。外刀流の看板に泥を塗ることになるのだぞ」

「……考えが及びませんでした」

光悦は深々と頭を下げた。正忠の怒りはもつともすぎて言い訳することさえできない。

「……申し開きのしようがございませぬ。どのような処罰も、受ける覚悟にございます」

しかし、天を仰いでため息をついてから、正忠は口調を和らげた。

「いや、この件についてはむしろお前こそ外刀流よ。世間体に囚われて振るべき刀を振るわぬようでは、臆病者の誹りを受けても仕方がない。武士の猛々しさを儂は少し忘れていたようだ」

「……お師匠様は外刀流を背負われる方。世間への配慮は当然かと愚考いたします」

「酒の勢いで刀を抜いたのならば許さぬが、お前は大義のために悪党を成敗したのだ。大つぴらに褒めるわけにはいかぬが——外刀流としては、善し！」

「……」寛恕に言葉もありません」

光悦は深く頭を垂れた。しかしそれだけで終わらず、正忠はさらに聞いてきた。

「その藤という名の禿が気になるのか？」

「……拙者は童女に懸想する趣向はありません」

慌てて光悦は否定した。

「分かつておる。剣以外に目もくれぬお前にしては珍しいと思っただけだ」

「……それは」

顔を上げよ、と言われ光悦は顔を上げた。正忠は鋭い目で彼を見据えていた。

「焦っているのか、志度光悦」

まるで迷妄に囚われた若い僧を、徳を積んだ優しくも厳しい老僧が一喝したかのようだった。焦り。それはただ一つの言葉に帰結する。「業病」。肺を蝕むそれは、光悦の体を確実に死へと引きずり込みつつある。けれども、だからと言って光悦には何をするべきなのかは分からない。あまりにもこの病と自分は不可分だった。

「……分かりません」

「死を受け入れず、最後まで足掻くのが外刀流よ。お前の焦りは恥ではない」

そこまで言うとは、正忠は一度も見せたことのない顔をした。まるで父親のような、優しい顔を。

「お前の病苦を、儂が少しでも肩代わりしてやりたかった」

「……もったいないお言葉です」
冷えた血が熱を帯びるを光悦は感じていた。人として慈しまれる
ことが嬉しかった。



第11話：光悦ももちろん行くよな



うだるような暑い夏の日のことだった。蝉時雨の中、道には陽炎が
でき、雲助が汗をぬぐいながら駕籠を担いで走っている。外刀流の道
場の離れで、門下生たちが縁側で入道雲を眺めていた。一人、光悦だ
けが畳の上で刀を抱いてうずくまっているが、残りは縁側で素足をた
らいに入れて少しでも涼もうとしている。

「暑いなあ。なんだよこの暑さは」

「お天道様もそのうち燃え尽きちまうんじゃないかねえかってくらいだな」

河村勘兵衛と蜂須賀甚六がぐったりしながらそう言っている。

「おい、光悦。お前だって暑いよなあ」

甚六が部屋の中、ふすまの陰でじっとしている光悦に問う。

「……はい。暑うございます」

「その割には顔に出てねえよなあ」

甚六の言うとおり、他の門下生と違い光悦の顔は暑さでうんざりし
ている様子はない。平時と同じ、生気のない目と顔つきのままだ。

「体には気をつけろよ、光悦。お前は病人なんだからな」

「そうそう。丈夫だけが取り柄の俺だってへばるんだ。体は大事にし
ねえとな」

「……心得ております」

光悦は蚊の鳴くような声で答えた。

「しかし、こうやって暑い暑いって言うてるだけじゃ面白くねえよな
あ」

「甘酒でも飲むか？ 印紙で冷やすぜ」

「もったいないだろ。お前のために使えって」

そう言っている時だった。

「——おい、お前たち。いい知らせだぞ」

母屋の方からやってきた巨軀は、明らかに石動だった。

「あ、石動の兄い。どうしたんです？」

「もうじき夏の祭りだが、俺たちも行ってもいいとのことだ。たまには羽を伸ばせとお師匠様が言ってくださったんだ」

「本当ですか！ そりゃ嬉しいや！ 暑さも吹っ飛ばしてもんだ！」

立ち上がって喜びをあらわにする勘兵衛に石動は苦笑する。

「はは、現金な奴め」

光悦は石動の言葉に耳を傾けているが、何の反応もしない。

「当日は吉原の遊び女たちも屋形船を出して舟遊びとしゃれこむらしいじゃないか。俺はぜひ行きたいねえ。いやあ、お師匠様には感謝だなあ」

女遊びには人一倍詳しい甚六がすぐにそんなことを言う。もしかしたら、許可が下りなくてもこっそり抜け出した可能性もありそう
だ。

「あまり羽目を外すなよ。船から川に投げ込まれても俺は助けんからな」

「分かってるって。兄いに迷惑はかけませんってば」

兄弟子たちが喜ぶのをじっと光悦は無言で見ている。そこに、笑顔のまま石動が近づく。下駄を脱いで畳の上上がる。

「光悦ももちろん行くよな」

「……いえ、拙者は」

元より病身の光悦は喧騒を好まない。

「行くよな？」

石動が迫る。塗り壁のごとき巨漢が迫ると有無を言わさぬ迫力がある。

「……ご同行させていただきます」

「戦と同じだ。食べられる時に食べておくように、遊べる時に遊んでおけ。分かったか」

光悦がうなずくと、石動は身を起こし大声を上げた。

「といっても、俺も楽しみたいからな。奉納相撲があるそうだから、一暴れしたくて仕方がない。お前たちの面倒は見きれん。当日は自由にふるまえ。どこへ行くのも俺が許す！」

途端に、わつと歓声が上がった。石動は満足げにうなずき、それから光悦に視線を向ける。

「光悦、お前も好きにしろ。きつと楽しめるぞ」

「……はい」

静かに立ち上がった光悦に、足を手ぬぐいで拭った甚六が近づくと、

「おい光悦、石動の兄いがお前のことを思ってたのが分かるよな？」

確かに、石動が無理に進めなければ光悦は祭りに行くことはなかっただろう。

「……出来ない弟弟子で恐れ入ります」

「なあに、いいんだよ。同門じゃねえか」

甚六はそう言うと、光悦の肩を軽く叩いた。

「せっかくの祭りだ。楽しもうぜ」

勘兵衛も笑いながら伸びをする。この方々には世話になりっぱなしだ、と改めて光悦は思うのだった。



第12話：ご安心を。光悦様と駆け落ちはしませんから



そして、夏祭りの当日。夜の江戸の町はひときわにぎわっていた。神輿が練り歩き、神社の参道にはずらりと屋台が並んでいる。ふらりと光悦は歩いていった。人混みの中にためらいなく入っていくが、肩どころか刀の鞘さえぶつかることなくすり抜けるようにして進んでいく。幽鬼のようだったその痩身も、少しは祭りの賑わいで生気を帯びている。

石動は奉納相撲に飛び入り参加して力士たちをなぎ倒し、勘兵衛は食べ歩き。そして甚六は屋形船の方へと向かっていた。光悦は足の向くままに歩いていく。喧騒は人ごとに感じていた。気が付くと、いつの間にか大川の岸边に来ていた。多くの男たちが屋形船で艶やかな姿を見せる太夫たちを誉めそやしている。何人かは船に招かれているようだ。

「……甚六殿はうまく乗船できただろうか」

そう呟く光悦の目に、一艘の船が岸に近づくのが見えた。泊まって下船するのは太夫だ。岸には別の妓楼の太夫たちと思しき者たちがいる。どうやら、一艘をいくつかの妓楼が共同で借りているようだ。

「……あれは」

船から降りる太夫と、その側につく禿には見覚えがあった。

二人は徒桜と藤だった。少しためらったが、光悦は二人の方へと近づいていった。人垣に触れることなくすり抜けてくる痩身の男の姿に、二人はすぐに気が付いたようだった。

「おや、光悦殿か」

「こんばんは、光悦様」

徒桜は今宵に合わせて美しく着飾っていた。禿の藤もいつもの朱

色の着物ではなく、控えめながらも髪飾りや帯飾りをつけている。

「……大事なようだな」

光悦がそう言うと、徒桜は嬉しそうに笑う。

「ああ、そなたのおかげだ。ようやく兄も彼岸に逝けたらしい。重ねて感謝する」

「……用心棒としてすべきことをしたまでのこと。感謝ならばうまく拙者を引き込んだ藤に言うといい。藤は口が上手だ」

「はは、そうか。藤のことをそう言ってくれるとありがたい」

笑いながら、光悦は内心では安堵していた。どうやら徒桜は兄を喪ったことを受け止められたらしい。あるいは、兄の貞盛が迷った理由は、彼女の未練にこそあったのかもしれない。

「ところで光悦殿、今夜の予定は何かおありか？」

「……いや、特には」

正直に光悦が言うと、徒桜はしばし考えてから提案してきた。

「そうか。どうだろうか、これも数奇な縁。どうだ？ 藤と共に祭りを見て回るのはいかがだろうか？」

「……よいのか？ それは……」

吉原の遊女が外を出歩くのは困るはずだ。確かに藤は禿だが、吉原の女であることに変わりはない。

「ああ。心配するな。庄悟殿は誠実な主人だ。足抜けしたい太夫は彼の妓楼にはおらぬよ。藤もそうだ」

光悦が藤を見ると、藤は当然のような顔でうなずいた。

「ええ。私は吉原の庄子楼が家ですから」

「光悦殿にはよくしていただいた。庄悟殿も常々、用心棒代が藤の芸事だけでは足りぬと言っていたよ。祭りを将来の太夫である藤と楽しむのはどうだろうか？」

しかし、そこで藤が不意に口を挟んだ。

「ですが、私のような童女がいては、酒も女遊びも光悦様が控えてしまいかもしれませんね」

「藤、そうやってお前はせっかくまとまりかけた話をひっくり返すな」
二人の会話にわずかに笑いつつ、光悦はうなずいた。

「……藤さえよければ、しばらくの間あずかろう」

「ありがとうございます、光悦様。ぜひお願いします」

ペこりと頭を下げる藤。連れ立って行こうとしたとき、藤は振り返って徒桜に言った。

「ご安心を。光悦様と駆け落ちはしませんから」

何を言うと思えば、と思いつつ光悦も徒桜に言った。

「……安心しろ。藤をかどわかしはしない」

「はは、二人とも仲が良いな」

そう言いつつも、徒桜の顔には笑みが浮かんでいた。

「楽しんでくるがよい。藤、光悦殿」



第13話：旦那あ、青田買いはよくありませんぜ



祭りの屋台が並ぶ神社の参道を、光悦と藤は並んで歩いている。年端も行かない童女の藤が隣にいます、少しは剣呑な光悦の雰囲気は和らぐのか、道行く人々が光悦を見ておびえた顔で道を譲ることはない。藤の体は小さいが、光悦が手を引くことはなかった。その代わりさりげなく彼女が人ごみに埋もれないように誘導していた。

それに気づいているのかいのかは分からないが、藤は物珍しそうに屋台を見て回っている。焼き菓子、水飴、団子。菓子だけでなく面や独楽などの遊具なども藤の目を引いているらしい。

「どうかされましたか？ 光悦様」

そんな年齢相応の好奇心旺盛な姿を見せる藤を、つい光悦は目で追っていた。それに気づいたらしく、藤が彼の顔を見上げる。

「……いや」

「巧言令色鮮し仁、と昔から申しますが、私の前では気取らないでくださいな」

平然と故事成語を口にする藤だった。これでまだ十二歳とはとても思えない。

「……まったく、お主という者は」

思えば、最初に莊子楼を訪れたのはただの偶然だった。しかし何の縁か、この藤という禿は、光悦の人生にするりと猫の子のように入り込んでいた。

藤の顔はまるで万華鏡のように変幻する。一瞬前は年齢相応の童女、しかし一瞬後はふてぶてしささえある禿、というようにだ。成長したら魔性の女となるのは間違いないだろう。

「それで、どうされたのですか？」

再び促され、ようやく光悦は口を開く。

「……祭りの屋台に目を輝かせているお主を見ると……」

「見ると？」

「……お主も年端も行かぬ童女であった、と改めて実感したのだ」

ようやく思うところを口にした光悦だったが、それに対し藤は着物の袖を口元に当てた。

「まあ、恥ずかしいです」

口ではそう言っているが、藤が本当に恥ずかしがっているかどうかは分からない。態度だけかもしれない。

「……常日頃からお主は大人びていたからな」

光悦の感想ももつともだ。これほど肝が据わっている少女など他にはいない。だがそれは、彼女が痴れているからなのだが。しかし、光悦の言葉を聞いた藤は、少し考え込むような態度を取った。

「困りました。これからはどういう顔をいたしましょうか」

「どうやら一丁前に照れているようだ。」

「……拙者の前では、気取る必要はない」

先ほどの藤の言葉を返す。光悦なりの意趣返しともいえる言葉だ。

「あら、一本取られてしまいました」

くすくすと熟練の太夫のように笑う藤が不意に立ち止まった。彼女の視線の先にあるものを見た光悦は、わずかに苦笑した。そこには、飴細工の屋台があった。練った飴を鋏で様々な細工をして売る職人たちがいる。

「……一つもらおうか」

そちらに近づくと光悦に藤は続く。

「光悦様は甘党なのですね」

「……お主に買うのだが」

一瞬、要らぬ気づかいだったのかと光悦は思った。何千と繰り返した立ち合いの場合は、最適の動きが身に刻まれている。しかし、藤という童女を相手にすると、とたんに剣の経験は無意味となってしまうのだ。それが歯がゆくもあり、同時に面白くもあった。

「ふふ、いただきます」

しかし幸い、光悦の逡巡は杞憂に終わった。嬉しそうにする藤を見て光悦は胸をなでおろした。屋台の職人は水飴を練り、それが完全に

固まる前に素早い手つきで鋏を入れて形に整えていく。自分は剣、一方この職人は鋏。握る得物こそ違うが、やはり熟練の者の腕は見ていて素晴らしいと光悦は思った。

果たして自分の剣はこうなのだろうか。修羅になるまで鍛えた自分の剣は。考える間もなく、餡は出来上がった。形は金魚だ。

「へい一丁上がり。お子さんですかい……って、吉原の禿じやないですかい!？」

それまで餡にのみ集中していた職人は、代金を払った光悦の隣にいたのが禿だと今さら気づいたらしい。驚きの声を上げて目を丸くする。

「……知り合いの太夫に、祭りを共に見て回るよう促されてな」

光悦は大真面目な顔でそう言ったが、職人は目尻を下げてにやにやと笑った。

「旦那あ、青田買いはよくありませんぜ。いくらなんでも、唾をつけとくのが早すぎますってば」

「……いや、違う」

どうやら職人は、光悦が藤を今のうちに自分好みにしようとしていと勘違いしたらしい。

「まあ、そうしたくなる気持ちは分かりますけどさあ。いつかその子が太夫になっても、うちを鼻屑にしてください」

彼は藤にも微笑みかけた。

「お前さんも、今のうちに目いっぱい遊んでおきな。客がついてからは自由がきかなくなるからな」

「はい。ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる藤は、いつも通りの落ち着き払った声と態度だった。



第14話：もしかして私、光悦様に口説かれているの
でしようか？



飴細工の屋台を離れて二人は歩く。藤はじつと金魚の形に整えられた飴を眺めている。わずかに舌の先端で金魚の尾びれに触れたが、それ以上口をつけることはない。

「……どうだ？」

「食べてしまうのがもったいないです」

「……団子かあられの方がよかつただろうか？」

金魚の形をした飴に心を奪われている藤の姿は、見ていて愛らしい。

だが、飴は飴である。食べないと傷んでしまう。光悦はついそう言ったのだが、藤は頬を膨らませた。

「光悦様、無粋なことをおっしゃらないでくださいな。遊女に贈り物をする際に、鬼瓦をいきなり持つてくるようなものですよ」

「……すまぬ」

「あら、冗談でしたのにお笑いになりませんか。少し残念です」

いけしやあしやあと藤は言う。その様子に、光悦は思わずため息をつく。

「……いやはや。お主の心を測るのは、お師匠様との立ち合いで一太刀浴びせるよりも難しい」

藤は上機嫌に笑うと、再び光悦の隣に並ぶ。

「私で慣れておけば、大抵の遊女とはそつなく言葉を交わすことができますよ。何事も稽古、です」

「……違いはない」

神社の石段を二人は下りていく。藤の歩調に合わせて光悦は歩みを緩めた。自然と、藤の小さな体が光悦に寄り添った。

「それにしても、やはり私は青田なのですね」

「……何が言いたい」

「それはまあ、私は童女ですよ。禿ですよ。ですけど、今ここにいる私ではなく、後々花魁となった私に皆様が期待されているようで、少し口惜しいです」

何を言い出すかと思えば、と光悦は思う。どう控えめに見積もつても禿は禿だ。藤は確かに年齢の割にひどく大人びているが、だからといって花魁と同じ技艺や婀娜（あだ）を求めるのは無理難題と言うものだ。

「……お主を女として見るのは難しい」

「はいはい。光悦様も姐さん女房がお好みのようで。今度金の草鞋をこさえてお渡ししましょうか？」

何やら藤は少し不機嫌になってしまったようだ。これまで一度もそのような顔を見たことがないので光悦は意外に思う。

「……そうではない」

だが、彼は噺家ではない。立て板に水とばかりに言葉が出てくることはない。

「……常在戦場こそが剣客の心得である。だが、今のお主とこうしている、不思議と心が穏やかになる。悪くない心持ちだ」

思い切つて、光悦は思つたままを口にしてみた。それは最初に莊子楼で藤にもてなされた時から変わらない。この痴れた禿は何も恐れず、何も拒絶せず、ただそこに当然のような顔でいる。ある意味それは、剣と我が身を一体とした剣豪の立ち位置に近い。それが少女の姿でいるのが面白くもあり、奇妙な趣がある。

だがそれだけではない。志度光悦という病に侵された剣客にとって、この世はそれ自体が苦海である。生きるということは苦しみと同義。だが、それは花魁もそうだ。吉原は苦海とはよく言われる。そのただ中であつて、狂つているとはいえ悠然とした藤の姿は光悦には新鮮であつた。光悦の精一杯の賛辞に、藤は足を止めた。

「……どうした？」

藤はきよとんとした顔で光悦をじつと見る。

「もしかして私、光悦様に口説かれているのでしょうか？」

「……なに？」

「まあ、困ってしまいます。なんと禿に色目を使う殿方がいらっしやいますとは」

わざとらしく藤はそう言つて、くるりと背を向ける。しかし、その声音はどこか弾んでいるようにも聞こえた。

「徒桜には内緒にして下さいね」

「……何をだ？」

「ふふつ。お分かりのくせに」

くすくすと藤は笑う。どうやら機嫌はすっかり直ったようだ。

「……女心と秋の空、とはこのことか」

「男心もそうですよ」

いいように手玉に取られている感覚を光悦は味わっていた。しかし、彼はかすかに思った。藤が何事もなく育つことができたら――きつとこのように笑えたのだろうか、と。



少し藤の足取りが遅れ始めた様子だったので、光悦は川べりで足を止めて休むことにした。思えば、妓楼で芸事を学ぶのが日常の藤にとって、この程度を歩くだけでもかなり疲れることだったのかもしれない。

「……すまぬ。少し疲れたであろう」

「いいえ。さすがはお侍様。無駄の少しもない身のこなしで、後に続いて歩くのも楽でした」

世辞か本音か分からないことを藤は言う。もし世辞だとするならば堂に入ったものだ、と光悦は思う。

「光悦様は今夜の祭りは楽しかったですか？」

「……無論」

光悦はうなづく。騒がしい祭りに興味はないが、藤と共に歩く人混みは悪くなかった。

「ほつとしました。私のような童が一緒では、酒も女遊びも楽しめないのでは、と心配でしたから」

「……騒がしいのは苦手だ。拙者は賑わいよりも静けさの方が心地よい」

周りでは光悦たちと同じく、祭りで歩き疲れたような親子連れや老人たちが思い思いの場所で休んでいる。

「……お主も楽しめたか？」

「はい。今宵だけは吉原の禿ではなく、一人のおなごとしてふるまうことができた気がいたします」

「……ならばよし」

自分のような不愛想な剣客では、せいぜい用心棒程度にしかならなかっただろう。それでも、藤が心置きなく祭りの賑わいを見て回ることができたのならば、それはそれでよかったのだ、と光悦は思うことにした。ふと、藤が身を光悦に寄せて見上げる。

「光悦様……」

「……なんだ」

「あの時のように、光悦様の刀が見とうございます」

それはまるで、花魁が殿方にしだれかかり「旦那のいいところ、見せておくんなんし」と囁くようだった。珍しいこともあるものだ、と光悦は感じる。藤は刀に関心があるようには見えない。それこそ彼女の目の前で、光悦は貞盛と死闘を繰り広げた。それを見ても、藤は怯えたりすることもなくけろりとしていたのだ。完全に無関心、といった感じだ。

あるいは、これは姉分の花魁に男に取り入る方法を実践しろとそそのかされたのかもしれない。いずれにせよ、光悦としては断る理由もさほどなかった。

「……承知」

藤をそつと右手で光悦で抱く。技量によっては、人の胴さえ両断する刀を抜刀するのだ。万が一に備えて藤を押さえるのは当然だった。そのまま彼の――左手が動いた。

一瞬の抜刀。それも左手。しかも逆手での抜刀だ。息がかかるほ

ど密着した状態、あるいは右手がふさがった時の緊急用の抜刀術だ。その切っ先が月に届かんばかりに突き上げられ、そして降ろされる。

「……蛾だ」

あの時——初めて藤と荘子楼で会った時と同じように、ぽとりと宙を舞っていた蛾が胴を真つ二つに斬られ、地に落ちる。

「ふふ、前よりも刀が怖い顔をしています」

藤が地に落ちた蛾を見つめてそう呟いた時だった。

「おーい！ そろそろ花火だ花火！ いい場所は早い者勝ちだぜ！」

向こうの橋から見物人の誰かが大声でこっちに向かって叫んでいる。

「……花火を見たら戻ろうか」

「はい」

光悦がふらりと歩き出すと、藤はその後にとことこと続いた。



第15話：血の臭いがします、光悦様



二人が橋の方にたどり着き、人混みの中で並んで空を見上げたころ、ちようど花火が打ちあがり始めた。大きな爆発音とともに、空に光の花が咲く。見物人の歓声と「玉屋」「鍵屋」という掛け声が響き渡る。「鴉屋」という周りとは違うことをしたいひねくれ者の声も聞こえてきた。同時に笑い声も上がる。まさに江戸の夏の風物詩と言える一幕だ。

「とてもきれいですね」

藤がうつとりとした声で空を見ながら言う。

「ぱつと空を彩ってすぐに消えていくのを見ると、儂さも感じます」

「……それでよい。消えぬ花火など眩しいだけだ」

「ふふ、その通りです」

藤の手がそつと光悦の手に触れ、光悦は藤の顔を見下ろす。徒桜の真似事だろうか。

「また来年も、こうして光悦様と祭りを見て回りたいです」

何気なく藤はそう言ったのだろう。しかしその「来年」という言葉が光悦の心に痛みを生んだ。他の門下生たちも、どこかで空を見上げているのだろうか。

「……来年、か」

「鬼が笑いますか？」

「……来年は、拙者はもうこの世にはおらぬかもしれん」

「え？」

一瞬、藤の顔と声が年齢相応になった。藤の驚きに染まった顔を、光悦は初めて見た。

「……見ての通り、拙者は肺を患っておる。最近とみに心身の衰えを感じる時が多くなった」

「そ、そうですか」

「……思っていたよりも、死神の足音が近づいてきたようだ。来年の供は保証できぬ」

藤は何か言いたげだったが、光悦はそれを遮るように言葉を続けた。

「……それでも、できることなら拙者は、お主とまたここに来てみたいと思う」

未練がましいことを言う、と内心で光悦は自嘲した。死病は受け入れたはずだ。元より自分は剣客。生死事大、無常迅速。それを心に留めて刀を振るってきたというのに、童女一人の心の揺れ動きに懊悩するとは。剣客として未熟もいいところだ。

「……すまぬ。祭りの興に水を差したな」

「いいえ。そのようなことはありません」

年端も行かない童女の顔は消え、そこにいたのは、あのいつもの不思議な落ち着きを見せる禿だった。

「では、今この時を楽しむことにいたしましょう。ほら、この騒がしさでは死神の足音も聞こえなくなるでしょう?」

藤はほほ笑む。

「……そうだな」

三尺玉が弾けて江戸の夜気を震わせるまで、二人は空を眺めるのであった。



祭りが終わり、藤を送っていく途中のことだった。

「どいたどいた! 待ていこのスリめっ! 神妙にしろってんだ!」

手練れのスリと思しき男を岡っ引きが追いかけていく。走り抜けていくその体が、藤にぶつかったのだ。

「あつ……」

よろけた藤が転びそうになるのを、素早く光悦は手を伸ばして抱きとめた。

小さな身体だった。肉があまりついていない細身だけでなく、骨

まで細いのが触れた手から伝わる。わずかに力を入れただけで折れてしまいそうだ。決して栄養状態が悪いのではなく、そもそも童女とはそういうか弱いものだった。改めて光悦はそのことを感じた。

「……大事ないか」

「ありがとうございます」

男の腕に抱かれていても、藤はまったく怖気づいたり、逆に恥ずかしがる様子もない。いつもの屈託のない顔で光悦を見上げる。

「申し訳ありません。私がぼうつとしていたので」

「……気にすることは無い。お主に怪我がなくてよかったです」

藤を抱きかかえるようにして、そっと地面に立たせようとしたその時だった。

藤がまるで仲睦まじい恋人のようにして、背伸びすると光悦の腕の中に身を寄せた。

「……藤」

どういふつもりだ、と光悦は問おうとする。男にここまでするようにと姉分の遊女は藤に教え込んだのだろうか。

「血の臭いがします、光悦様」

藤が光悦の首にしがみつくようにして手を回し、耳元で囁いた。

「……稽古の最中にどこか切ったのだろうか」

光悦は藤の意図が分からず、ただそう言った。鍛錬の際に傷つくのは日常茶飯事だ。刀を振るい続けて手の皮がめくれてようやく認められるのだ。あの時の光悦の傷ついた手に包帯を巻いた石動の大きな手はよく覚えている。彼は「これでお前も外刀流だ。よく耐えたな」と言ってくれた。血の臭いなど、あまりにも嗅ぎなれている。

しかし、藤が首を横に振る気配がした。

「いいえ。何人かの血の混じった臭いです。……五人ほど、でしょうか」

光悦の息が止まった。剣客にあるまじきことに、言葉だけで身がすくむ思いがした。藤は何を言っているのか。まさか、自分が斬った五人の盗人たちのことを言っているのだろうか。

だとしたら、なぜ藤は気づいたのだ？ 本当に血の臭いをかぎ分け

たのか？ 様々な疑問が膨れ上がっていく。しかし、藤は――

「冗談です」

「……なに？」

藤の手が緩んだので、光悦はわずかに身を離す。間近に藤の顔があった。彼女の表情は変わらない。だが、それがかえって不気味だった。

「はい。冗談ですよ」

光悦が何も言えずに藤を地面に下ろした時、岡っ引きが頭をかきながら戻ってきた。

「いやあすまねえ。本当にすまん。お前さん、怪我しなかったかい？」
そう言っつて岡っ引きは藤に頭を下げる。

「ええ。頼りになるお侍様が転ばぬ先の杖となって下さいましたので」

平然としている藤を見て、光悦はそれ以上何も問うことはできなかった。



第16話：それで、お前さんの小野小町はどんなお人なんだよ？



秋の夜長。外刀流の門下生たちは連れ立って寄席を見に来ていた。高座では新人の噺家が時事を交えた講談を語っている。

「——すると男の方が言うんですよ。『ヤイお前エ。俺をその気にさせといて自分はいいところのお妾たアやれ憎たらしい。ええイこん畜生、この雌狐めい』」

その仕草は緊張があちこちに見受けられ、言葉もぎこちない。

「——って言いますが、あア男の嫉妬つてのは見苦しいですねエ。こんな言いがかりに女だつて黙ってられません。『なんだいアンタつて人は。昔ツから蒔かぬ種は生えぬつて言うじやないかい。遊び女にかんざし一つ送らずに自分のモンにしようなんてこの唐変木のけちん坊め、顔を洗つて出直してきな』。まアこうなりましようなあ。しかし——」

客席の石動が腕を組んで唸る。

「下手だな、あの噺家は」

容赦のない一言に、甚六がついかばう。

「まあまあ、兄い。こういうのは誰だつて最初はこんなもんですよ」

勘兵衛も甚六の肩を持つ。

「そうそう、俺だつて刀を握り始めたころはひどいもんだつたでしよう？ 場数を踏めばそのうちよくなりますつてば。次回、次々回に期待つてとこですな」

甚六は隣でじつと座つたままの光悦の方を見て言う。

「光悦、もう少し待つてな。あれが終われば瓢箪亭の抱腹絶倒の話が聞けるぜ。お前えの笑う顔が見てえよなあ」

何となくそう言った甚六だが、訝しそくに目を細めた。

「ん？ どうしたい光悦。なんか悪いもんでも食ったか？」

客席の暗がりの中、光悦はうづくまるように座っている。

いつものように、死人のような陰鬱な気配だ。けれども、同じ道場で剣を学ぶ甚六は、なんとなく光悦の様子が普段と異なっているように感じた。光悦はじつと、高座を見ている。その顔がこちらを向いた。

「……いえ、少し」

結局その違和感は、ようやく新人が引っ込んで瓢箪亭の噺家がやんやの喝采と共に高座に上がったことで消えるのだった。



数日後。光悦、石動、勘兵衛、甚六が夕餉を済ませた時のことだった。

「……甚六殿、少しお時間よろしいでしょうか？」

将棋盤の上に駒を並べて石動と将棋に興じていた甚六は目を上げる。

「おう、光悦。どうした。改まって」

「……実は、お頼みしたいことがございます」

隣で畳の上に寝そべっていた勘兵衛もこちらを向いた。

「なんだあ？ 甚六は金持ってねえぞ。もし入り用なら俺が貸してやるぜ」

「……いえ、金の無心ではございません」

光悦は甚六の前に正座する。

「……拙者、女に贈り物をするべきと思いましたが、何を贈るべきか皆目見当がつきませぬ。かくなる上は、百戦錬磨の蜂須賀甚六殿のお知恵を拝借したいと願ひ、お願い申し上げます」

光悦の淡々とした告白を聞いて、甚六と勘兵衛は顔を見合わせる。

「ハ」……」

「ハ」……」

「……ハ」？」

光悦が首をかしげたのとほぼ同時に、二人は躍り上がった。

「こいつあめでてえ！ いやおったまげたぜ。そうかそうか光悦、お前にもついに春が来たか！ いやあよかった！」

甚六が手を叩き、勘兵衛も感無量といった顔でうなづく。

「まったくだぜ。いつもむすつとした顔で刀ばかり振るってたから、てつきり俺あ枯れてるんだと思ってたんだが、お前もやっぱり男じゃねえか！」

一方で、あぐらをかいたままの石動が太い声でくぎを刺す。

「勘兵衛、俺たちが刀ばかり振るっても悪いことは何一つないぞ」

「あ、あはは……すいません兄い」

頭をかきつつ勘兵衛は座りなおす。

「……もしご迷惑ならば、無理にとは申しませぬが」

大喜びする二人をよそに、光悦はいつものように淡々としていた。

「いや、いやいやいや、ちっとも迷惑じゃねえよ。いいぜ光悦、大船に乗ったつもりで俺を頼りな」

「……ありがたき幸せ」

畳に伏す光悦を見て、満面の笑みで甚六は自分の胸を親指で差す。

「じゃあ、まず俺を先生と呼べ」

「……はい、蜂須賀先生」

躊躇せずに光悦は甚六を先生と呼ぶ。さすがに石動が甚六をにらんだ。

「おい。調子に乗るな、甚六」

不動明王さながらの視線を受け、たちまち甚六は前言をひるがえす。

「あ、いや、冗談だ冗談。お師匠様がおられるのに勝手に先生なんて名乗ったら無礼にも程があらア」

軽く咳払いをしてから、甚六は尋ねる。

「まず、俺も仙人や天狗じゃねえからな。相手がどんな女か分からなきや助け船も出せねえ。それで、お前さんの小野小町はどんなお人なんだよ？ 花も恥じらう町娘か？ おきやんな男勝りか？ それともやっぱりしつとりした御家さんかい？」

光悦は顔を上げて、大まじめにこう答えた。

「……以前もお話しした、莊子楼の藤という禿です」

当然のことだが、周囲は水を打ったように静まりかえった。

「……え？」

「……は？」

「……むう」

顔を見合わず勘兵衛と甚六。腕組みをして唸る石動。

「……何か？」

そして首を傾げる光悦。

「あ、ああ、いや〜なんて言うかなあ……」

「さすがの俺も童女に懸想したことはねえなあ……」

途方に暮れる勘兵衛と甚六を見つつ、石動が口を開いた。

「光悦よ、よく聞け」

「……はい」

「いくらなんでも相手が幼すぎる。考え直せ」

はた目から見れば、十代初めの童女に大の大人の剣客が熱を上げて
いるような構図だ。実直な石動がそういうのも無理はない。

「……いえ、拙者はそういう趣味では」

やはり淡々と光悦は首を横に振る。

「え？ でもお前さんはその禿に惚れてるんじゃないやねえのかい？」

「……違います」

甚六の言葉をあっさりとして光悦は否定した。

「……先日皆様と共に寄席を見た時、新米の噺家が言っておりました。
『惚れているくせに贈り物一つしないで口先だけでは、伝わるものも
伝わらない』と」

「あ？ あ〜そう言えばそんなのあったなあ」

甚六が何とか話を合わせようとする中、ぼそぼそと光悦は言葉を続
ける。

「……拙者もあの禿には世話になったと思っております。不慣れな拙
者でも嫌な顔一つせず、何より——鬼を斬るといふまたとない機会を
与えてくれた」

光悦はわずかに薄笑いを浮かべた。

「……心の中で礼を申しても無意味と悟りました。しかし、相手は客を取る前の見習い。何か贈ろうと思うも見当がつかぬ次第」

「こりや惚れてるな」

「間違いなくそうだな」

甚六と勘兵衛が互いに耳打ちする。

「茶化すな。光悦は真面目に聞いているのだぞ」

律儀に聞いているのは石動だけだ。

「……よろしければ、この若輩者に知恵をお貸し下さい」

「おう、分かったぜ。禿つてのは引つかかるが、女であることに代わりはねえ」

「……ありがとうございます」

改めて光悦は深々と頭を下げるのだった。



第17話……………猫です



後日、三人は連れだつて江戸の町を歩いていた。石動だけは用事でいない。

「相手は子供なんだからさあ、団子や飴、まあ奮発して金平糖つてところがいいんじゃないか？」

田舎者の勘兵衛がそう言うと、即座に甚六が否定する。

「バカ野郎。それじゃ食つておしまいじゃねえか。いいか？　こういうのは女に何度も見返させて——」

女好きの甚六は遊女の真似をして科を作る。

『ああ憎いお人。忘れたくてもこれを見る度にお顔がちらついて忘れられません』つて言わせるものじゃなくちゃいけねえんだよ。食い物は食べたら消えちまうだろうが」

「……………いえ、拙者は別に消えてしまつてもよいかと」

「光悦は素人なんだから黙つてろ。いいか、この件については俺の方が先輩だ」

「……………はい。承知しました」

光悦は口を挟むが一蹴された。建前としては光悦の頼みを聞いて、禿の藤にふさわしい贈り物を探してはいる。でも同時に、やはり江戸っ子である。何だかんだ言つて、気の合う悪友で肩を並べて商店の冷やかしをしているのも事実だ。光悦はダシにされたようなものだが、当の光悦本人はこのそぞろ歩きを楽しんでいた。

「風車や絵双六もあるな。お、人形だ。こういうのはガキの時分には嬉しいんだよなあ」

勘兵衛が足を止めたのは、子供の玩具を並べた店だ。三つ折人形という着物を着た人形を眺める勘兵衛の目には、昔を思う光があった。田舎の出の彼だ。姉や妹はこういう人形で遊ぶ機会などなかったことだろう。

「どうだ光悦？」

無言で光悦が店先の風車を手に取った。

「……ぶっ！」

「……ははっ！」

勘兵衛と甚六が同時に吹き出した。

「童女に風車を差し出す光悦かあ……十手持ちが飛んでくる眺めだなこりゃ」

「瓦版に載るぜ、おい」

どう見ても、玩具で子供を誘い出す怪しい人さらいである。

「……拙者はこれ以上白州でお叱りを頂戴するのは遠慮願いたいです」

ただでさえ夜の墓場で亡者を斬っていて、奉行所にしよつ引かれて叱られた光悦である。また顔を出したら今度こそ仕置きされかねない。

「相手が吉原の禿つてのがくせ者だな。子供扱いしたらへそを曲げそうなんだよ」

『わちきを童扱いとは心ない殿方でありんす！』ってか？

二人は言いたい放題である。だが、光悦は少しも嫌な気にならなかった。

「となると、王道のかんざしや櫛、化粧道具つてことになるなあ」

勘兵衛が初心に返るが、甚六は乗る気ではない。

「いや、相手が太夫ならそれがはずれが少ないってことなんだが。何しろまだ禿なんだよなあ」

「なんか気を遣わせてしまいそうで悩むよな」

「……お二人とも、無理難題を押しつけてしまい申し訳ありません」

つい光悦は頭を下げる。

「いいっていいって。気にするなよ」

「そうそう。こっちは好きでやってんだからさ」

とは言うものの、いっこうに埒があかない。とうとう適当に冷やかすのにも飽きてきたのか、甚六が声を上げた。

「ええい！ やけっぱちだ。おい勘兵衛、光悦、こうなりや日頃の行い

に賭けて、仏様か神様に縁結びを願掛けしてから適当に見て回るぞ！」

「ああ、考えたって仕方ねえやい」

「……はい」

三人はたまたま見かけた稲荷に賽銭を投げ込んで手を合わせ、当てずっぽうに店に入っていく。

「……これは？」

「バカ。タヌキの置物なんて嫌がらせにしかならねえよ」

「こいつはどうだ？」

「七福神の置物じゃねえか。宝船に乗って縁起も良し……ってなるわけねえだろー！」

「じゃあ、これとかどうよ」

「舶来の人形か……おい高すぎだ！ 値段で相手に気後れさせたら逆に退かれるぞー！」

「……見つけました」

「キジの剥製かよ……料亭の開店祝いかつての！」

しばらくいくつかの店をはしごした結果――

「……猫です」

光悦が見つけたのは、三毛猫の色づけがされた猫の焼き物だった。

「おお、いいねえ。左甚五郎の眠り猫さながらだな」

「かわいいじゃねえか。ネズミは捕らねえけど、毛が着物につかないからいつでも側に置けるな」

光悦が手に持った猫の焼き物に顔を近づけて、二人はうなづく。

「いいねえ。おーい店主、勘定。こいつにするぜ」

かくして男三人による珍道中さながらの贈り物選びは終わったのだった。

「……お二人とも、今日は本当にありがとうございました」

「おう、俺も面白かったぜ」

「うまくいくといいな、光悦」

にやにや笑いながら肩を叩く二人に、わずかに光悦は眉を寄せる。

「……これは礼の品です。それ以上の意味はありません」

「はいはい。そういうことになっておいてやるぜ」

「そうだな。なにしろ禿じやあな」

何を言っても誤解は解けないと分かり、光悦はうなずくしかなかった。

「……はい」



第18話：莊子楼へようこそ。歓迎しよう、盛大にな



数日後の宵の口。光悦は吉原を歩いていた。手にした風呂敷に以前買った猫の焼き物を包んで持っている。剣客として手が塞がるのはあまり好まない。いつでも何かあれば風呂敷から手を離し、刀を抜ける用意自体はしている。しかし、常よりも光悦の動きは硬い。なるべく焼き物を地に落としたりたくないのが分かる。

高い品ではない。唯一無二の品でもない。しかし、これは確かに藤のために買ったものである。そこにはもう、一種の「縁」ができている。割れたら何事もなく買い直せばよい、というものでもないのだ。花街の吉原は相変わらずの賑わいだ。鼻の下を長く伸ばした男たちの間を、煙のようにすり抜けつつ光悦は進んでいく。

やがて、目的の莊子楼へとたどり着いた。

「おや、光悦殿ではないか。夏祭り以来だな」

二階の欄干にもたれ掛かって煙管を手にし、こちらを見下ろすのは徒桜だった。

「……御免」

「よく来てくれた。さあ、中へ中へ」

「……いや、拙者は」

光悦は客として来たわけではない。雇い人が遣り手に藤を呼んでもらおうと思っていたのだが、当てが外れた。

しかし既に徒桜の姿は二階にない。わざわざ出向くとは律儀だ、と思う。門扉に姿を現した徒桜は悠然と光悦を招く。

「莊子楼へようこそ。歓迎しよう、盛大にな」

何から何まで遊女らしくない徒桜の態度に、光悦は面食らった。光悦も吉原にはまったくの一見に等しいが、それでも徒桜が破天荒なのは見て分かる。

「ありんす言葉は使わないのか？」

「元武家の娘、というのが売りでな。こういうのがいい殿方も多いのだ」

堂に入った仕草で徒桜は煙管を吸う。火皿から漂うのは煙草ではなく、病気を予防する葉草の煙だ。彼女が大事に扱われているのがよく分かる。

「……お主が人気の花魁なのも分かる気がする」

「ははは、誉めてくれてありがたい。光悦殿はどうだ？　こういう私は好みの女か？」

「……拙者は、女の善し悪しを語れるほど通人ではない」

まじめに答えてから、光悦は下手なことを言ったと思った。

「……済まぬ。無粋であった」

「なんの。刀には刀の、槍には槍の、弓には弓のよさがある。それと同じだ。そなたはその無骨さが良い」

徒桜の持ち上げ方に光悦は舌を巻く。見事な話術だ。

「……一介の剣客には分不相応のもてなしだ」

「莊子楼は遊女の数は少なく大きさもさほどではないが、心づくしが標語だ。花街に来る男と言っても、鼻息の荒い者ばかりではない。寂しきや人恋しきに胸を焼く者も多いのだぞ」

「……後学になる」

そこまで言ってから、徒桜は改めて光悦に尋ねる。

「して、私をご指名かな。光悦殿であっても初会は初会。宴席に上がればつれなくさせてもらうぞ」

初会とは娼妓が初めて客に買われた時のことだ。遊女はわざとつれない態度で客をあしらい、会話をえしない。しかしそれでも客が二度目に彼女を呼んだ場合を裏。三度目以降を馴染（なじみ）という。吉原の複雑な作法の一つだ。

「……いや」

遊女らしく秋波を送る徒桜に対し、光悦は腹をくくって首を横に振った。結局自分は無骨に行くしかない。

「……単刀直入に言う。藤には世話になった。礼を言うだけでは武士として不義理というもの。礼の品を買ったので、渡したい」

「世話だと？」

「あの娘の計らいがなければ、拙者は……」

言いかけて光悦は言葉を濁す。

「いや、いろいろあつてな」

まさか「お主の兄を斬ることができた」とはさすがに言えなかった。しかし、徒桜もそれ以上追求しない。

「まったく、光悦殿も藤にはいいように翻弄されているな」

「……いや、そのような」

「ありがたい、心から礼を申し上げる」

その代わり、深々と徒桜は頭を下げた。

「あの子がここ吉原に来た理由は知っているか？」

顔を上げた徒桜に対し、光悦はうなずく。

「……元は大店の娘で、一家皆殺しに遭い、以後心にひびが入ったままだとか」

だから、自分はその下手人とおぼしき者たちを皆殺しにしたのだ。その感触は今も手に残っている。悪党であつても命は命かもしれない。一寸の虫にも五分の魂。だがそれは耳を貸す者に対する言い分だ。自分は剣客であり人斬りだ。人斬りに慈悲など皆無。事実、人を斬るのはおぞましくもあり——これ以上ない程血が滾ったのも事実だ。

「そうだ。天真爛漫で悠然としているが、あの子の心は今も壊れたまままだ」

徒桜の顔が悲しみに曇る。

「藤は明るく気が利くし、皆将来が楽しみだと言っている。しかし幼くして父も母も殺され、狂わなければ己を保っていられなかった心境はいかばかりか。手放しであの子の明るさを誉めることはできぬ。それは、心を壊して手にした金箔の明るさだ」

ひとしきり藤の境遇を嘆いた後、それでも徒桜は努めて顔を明るくした。

「だが同時に、あの子はそれさえも強みにして、したたかにこの吉原で生きようとしている。娼妓となればどんな男も手玉にとつてあしら

うことだろう。喜ばしくはある。心を失い、父母を失い、挙げ句の果てに夜鷹となつて貧しさにあえぐなど、神も仏もないではないか」

確かに、藤の将来は遊女だがそれなりに保証はされている。少なくとも蔑まれる私娼として辛い生活を強いられるわけではない。そこまで胸の内を語つてから、徒桜は苦笑した。

「いや、済まない。少し話しすぎた」

「……構わぬ」

「あの子の割れた心を、光悦殿が拾い集めてくれるのであれば、その心遣いは嬉しく思うぞ」

光悦は首を振った。

「……拙者はそんな、沙門のようなことをしてはいない」

「それでもよいのだ」

徒桜はにっこりと笑うと、改めて光悦を妓楼へと招く。

「ああ、待たせたな。上がってくれ。藤を呼んでくる」

「……よいのか？」

「あの子も将来の遊女だ。男に指名されたら行くのが道理だぞ」
知らず、光悦は手にした風呂敷包みを強く握るのだった。



第19話……………許せ、とは言わぬ。済まなかつた



徒桜が莊子楼の中に消えてからしばらく経ち、光悦が居心地の悪さを少し感じ始めた頃、ぱたぱたと藤が奥から出てきた。

「まあまあ。これは光悦様。お久しゅうございます」

藤は可愛らしく前掛けをつけ、それで手を拭いている。

「……………仕事中に呼び出して済まない」

自分の間の悪さに頭痛さえ光悦は覚えた。しかし、藤は気にせずほほ笑む。

「夕餉の仕度のお手伝いをしておりました。白粉や沈香の香りの代わりに、味噌と焼き魚の匂いにするのはお許し下さいませ」

「……………迷惑だったな。すぐに帰る」

「ふふ、姐さんたちも生温かく見守っていますよ。情に棹さして流されるお侍様は絵になりますので」

光悦は空恐ろしくなる。どうやら自分は藤に熱を上げていると思われるに違いない。

「それで、ご用の趣は？　もしかして、寂しくなられました？」

まるで一流の太夫のように、藤はそんなことを言ってきた。

「……………いや」

これではまるで花魁に袖にされて醜態をさらす野暮天だ。何から何まで藤の手の平の上にいる気がしつつ、光悦は覚悟を決めた。

「……………藤」

「はっ」

彼の覚悟を知るはずもなく、藤は無邪気な顔で彼を見上げる。

「……………世話になった。お主が引き合わせてくれたおかげで、拙者はまた少し、剣の道を究めることができたと思う」

「鬼を斬ることが剣の修行になるのでしょうか？」

「……………然り」

そう言いつつ、光悦は風呂敷包みを彼女に差し出した。

「……これは礼の品だ。よければ受け取ってくれ」

「まあ、何でしょうか？」

いそいそと藤は受け取り結び目をほどく。

「これは……」

「……猫だ」

「ええ。見れば分かりますとも」

風呂敷の中から出てきた三毛猫の焼き物を見て、藤は目を丸くしつつもそつと両手で持つ。

「ふふふ、可愛い猫ですこと」

気に入ったか、と聞こうとしたが黙る。間合いを保ち、後の先を狙うかのように待つ。

「とても気に入りました。これをもらってもよろしいのですか？」

「……ああ。同門の者たちと探し回ったが、お主の迷惑にならぬものが贈れたようでほっとした」

「それはそれは。吉原の女の冥利に尽きます」

藤は愛おしげに手で猫の背を撫でる。

「私、この子を枕元に置こうと思います。一緒に布団の中で寝ることはできませんけど、枕元なら皆の邪魔にもなりませんし」

「……そうか」

じつと藤は猫を凝視する。

「名前をつけましょうか。三毛猫ですから……ミケ、それとも……タマ。いいえ……」

不自然なほど藤は猫の焼き物を見つめ続ける。まるで、自分の心の奥底にどんと沈んでいくかのように。

「……モミジ」

ぼつり、と藤は呟いた。

「……良い名前だな」

光悦の声が聞こえないかのように、藤は憑かれたように猫から視線をはずさない。

「……きつとこの子は、いたずら好きで、ネズミを捕まえるのが上手

で、でも甘えん坊で——」

藤の唇がとめどなく言葉を紡ぎ続ける。

「……夜はすぐに布団に入ってくるし、私もこつそりと台所から煮干しや鰹節を持ってきて、夜やって来たモミジにあげて、そのまま抱きしめて布団に——」

——ぼろぼろと、涙が藤の目からこぼれた。

「あれ——？ 私……私……なぜ、泣いているのでしょうか——？」

「……藤」

涙が藤の頬を伝って、猫の焼き物の上に落ちた。

「どうしてでしょう？ この子を見ていると——なぜか、ひどく懐かしくて——悲しくて——知らず涙がこぼれてしまいます——」

涙腺だけが壊れてしまったかのように、泣き声さえなく涙だけが藤の目から流れ落ちる。

「……お主は」

きつとそれは、藤の忘れてしまった記憶だろう。忘れなければ、生きていけなかった記憶だ。大店の娘として育てられ、何不自由なく暮らしていた頃のことだ。きつと彼女の側に、この焼き物のような三毛猫がいたのだろう。彼女はそれをいたく可愛がり、寝ても覚めても一緒にいた。あの夜——彼女を除いた皆が盗人に惨殺されるまで。

だから、藤は壊れた。狂うことによつて、幸せだった日々を一切合切忘れ、吉原に生きる一人の禿として平然と生きている。凶らずとも、光悦の贈った猫の焼き物は、藤の塞がっていたはずの古傷をわずかに開いてしまったのだろう。涙は滲み出た血だ。

「も、申し訳ありません。あの、私は——どうして……泣く理由などないのに……涙が——」

こちらを向いて懸命に笑おうとして、しかしできずにいる藤を見て、光悦は初めて肺病以外の理由で胸が苦しくなるのを感じていた。

「……もうよむ」

手を伸ばして藤を抱こうとして、光悦は止めた。自分は人を斬るこ

とを熱望し、事実人を斬った男だ。血の臭いを藤につけたくはなかった。

「……涙は自然のものだ。泣きたいのならば、泣くとよい」

光悦の言葉を待っていたかのように、藤は彼にすがりついて号泣し始めた。何度もしゃくり上げ、声を上げて泣いた。かすかに「と様」「かか様」という言葉が嗚咽に混じる。光悦は藤のしたいようにさせていた。

「……許せ、とは言わぬ。済まなかった」

藤の泣く理由をかすかに察し、光悦は呟いた。藪蛇なことしかできない自分が情けなかった。



ひとしきり泣き終えてから、藤は光悦の着物から顔を上げた。ひしと掴んでいた袖からも手を離す。

「——みつともないとところを見せてしまいました」

「……お主はまだ童女だ。気にする必要はない」

「今日だけは、自分が太夫ではなく禿だったことに感謝しております」
もうその顔は、いつもの痴れた故の落ち着きで満ちた顔だった。

「泣くだけ泣いたらすすきりしてしまいました。私、なぜこんなに泣いたのでしょうか?」

「……拙者の贈った品があまりに無粋で、涙が出るほど呆れたのであらう」

「もう、茶化さないで下さいませ。私はこの子がとてもとても気に入りました。光悦様の贈り物、大変に嬉しかったですよ」

「……気に入ったのならば、拙者も肩の荷が下りた」

「はい。毎夜枕元において、朝起きたら声をかけて撫でてあげようと思えます」

藤のその言葉は、先程の繰り返した。

「……いつまでもお主を引き留めていては迷惑がかかる。これにて御免」

「はい。ぜひ今後も莊子楼をぐい鼻肩下さいな」

身を翻す光悦に藤は頭を下げる。去り際に、光悦の耳に藤の呟きが聞こえた。

「この子の名前……何にしましょう」

光悦は思わず振り返った。藤は焼き物を抱え、にっこりと笑った。

「とりあえず、ミケにしましょう。ねえミケ？」

その笑顔は何の心痛も憂いもない、しかしそれ故にどこか空虚だった。光悦はそれ以上何も言わずに妓楼を後にした。自分のしたこと、が果たして良いことだったのか、それとも悪いことだったのか、彼には最後まで分からないままだった。



第20話：その病が、お前の剣の道を絶つてもか？



秋も終わり、徐々に風の冷たさが冬のそれに変わりつつある日の午後。外刀流の道場で向かい合うのは光悦と、一目見てただ者ではないと分かる壮年の男性だった。彼は外刀流とは違い、由緒正しい柳生シン陰流の剣客、御子柴芳次（みこしば よしつぐ）である。將軍家剣術指南役という、このようなただの道場に絶対にいるはずのない人物だ。

シン陰流免許皆伝の彼は尚武の気風が甚だ盛んであり、時にこうして身分を隠してあちこちの道場で腕比べとしゃれこんでいる。もつとも、町人はまだしもここにいるのはいずれも剣術を学ぶ者だ。彼の身分はとうの昔にばれている。実際芳次もこの道場では、ことさらに出自を偽ることはない。

まさか將軍家直々の剣術指南役に木刀を当てることはできない。しかし、同じ武道に生きる者として、身分を越えて技を競い合いたい気持ちもまたある。芳次の豪快な人柄も手伝って、このお忍びの勝負は江戸の道場の公然の秘密となっていた。元より外刀流の指南である長谷川正忠は、この芳次の顔なじみである。

「——ええい!!」

割れんばかりの芳次の気合い。鼓膜が震えるだけでなく、後ろめたいものが浴びせられれば身がすくむ迫力である。振られる木刀を体を密着させてかわすのは光悦だ。

「……ふっ！」

爬虫類が威嚇するような短い気合い。ぬるり、と光悦の木刀が突き の形となって伸びる。振り下ろされた芳次の木刀が、間髪入れずに切り上げられる。

受けずに光悦はよろけるようにして後ろに下がった。ふらふらと 的を絞らせない外刀流の流れに？まれると、並の剣客ならば苛立ちと

焦りで自然と動きが大雑把になる。しかし、芳次は静かに木刀を正眼に構えた。よどみない水の流れ、苔むして大地に据えられた大岩。その二つが彼の構えに体现されている。剣客ならば惚れ惚れするような立ち姿だ。

光悦はひるまずに攻めかかった。転がるようにして木刀で足を払おうとする。惑わされずに、芳次は紙一重で届かない位置にずれる。同時に芳次の激しい踏み込み。

「せやあああー！」

床板が割れんばかりの音が響く。胸のすくような音だ。振り下ろされた木刀を光悦は受け、手首のひねりを利用しつつ脱力する。相手の刀を絡め体勢を崩そうとする。

だが、芳次は踏みとどまる。熟達の剣客の前に、搦手は通用しない。光悦が切っ先をひっかけようにして芳次の額を狙う。同時に芳次の突きが放たれた。互いに理解している。芳次は強く踏み込むことによつて切っ先からわずかに逃れることを。光悦は絶妙な間合いで身を倒すことによつて突きをおかわすことを。

——しかし。

「……ぐっ」

光悦の、それまで風に揺らぐ煙のような動きが大きく乱れた。耐えるように、堪えるように体が硬くなる。明らかに、肺からせり上がってくる不快感を必死で押さえ込もうとする動きだ。畢竟芳次の突きはかわすことができず、その切っ先が光悦の胸を、肋骨の間をめり込むように突いていた。



「……参りました」

その突きが決め手となり、光悦と芳次の立ち合いは終わった。肺腑を抉るようにして突かれた木刀の突き。その激痛を顔に出さず、光悦は木刀を置いて芳次の前に伏す。

「うむ。影と切り結び、煙と争うかのような手ごたえのなさ。まさに

変幻自在の外刀流に相応しき剣であつたぞ。見事」

「……もつたいないお言葉です」

あくまでも平静な光悦の前に、芳次が目を細めた。

「さすがは長谷川正忠の秘蔵っ子よ。あ奴、良い弟子を持った」

「……いえ」

「隠すでない。お前の太刀筋は柳のようになやかであり、決して折れず曲がらず、同時に隙あらば果敢に攻める意思を秘めておる。巢を張るオニグモの狩りを見たことがあるか？ 某はお前の剣にそれを見ただぞ」

こう見えて、芳次の趣味は昆虫の採集である。彼は光悦の剣に蜘蛛の如き狩獵本能を見出したらしい。

「……師の長谷川正忠殿の教えあつてのこと。これからも精進いたしまする」

神妙に伏せる光悦を見て、豪快に芳次は腕組みをする。

「しかし——どうした？ 最後にお前がよろけたのは、某の剣によるものではないな？」

「……いえ、拙者の力量が芳次様の気迫に吞まれただけのことです」

敗軍の将は兵を語らず。光悦は素直にそう言うが、芳次は少し困った顔をする。

「いや、まあ、お前がそう言うのも分かるがな。某は別に問いただしてゐるわけではない。言い訳とは思わぬ。いったいどうしたのだ？」

芳次がさらに尋ねるので、光悦は顔を上げた。

「……恐れながら、持病が悪化し時折呼吸が乱れまする」

「肺病か」

「……はい。医者の見立てでは、そろそろ覚悟を決めるべき時だとか」
「そうか。無念よな」

芳次は改めて光悦を見る。痩せた一目で病身と分かる青年だ。胡乱な目と気配は、身を蝕む業病の故。もしそれがなければ、光悦は飄々とした行雲流水の如き好漢だったことだろう。

「……己に課された宿命と受け止めております。これもまた、劍の糧になるかと」

病さえも剣の鋭さに変える。剣客としての模範解答を、しかし芳次は一喝する。

「その病が、お前の剣の道を絶つてもか？」

光悦は黙った。どれだけきれいな事を並べても、病は病だ。病のせいで剣は衰え、身は衰え、やがて無惨に死ぬ。その無念は決して消えない。消えない。

「……受け止めなくては、なりませぬ」

ややあつて、血を吐くようにして光悦は言った。何度も何度も自問自答した。業病に対する怨み。活人剣に対する妬み。師の長谷川正忠にも問われ、今ここでシン陰流の御子柴芳次にも問われる。たとえ鬼に変わるほど我が身を呪っても、病は消えない。受け止めるしかない——そう応えるのが光悦の精一杯だった。

光悦の言葉を、芳次は噛みしめるようにしてうなずいた。

「某も今は壮健だが、後二十も生きればお前と同じ所に立つであろう。その時某はどうするだろうな？ 仏にすがるか、それとも仏を恨むか。みつともない最期は迎えたくないものだ」

そうなのだ。光悦はただ早いだけ。いずれはどんな剣客も光悦のように衰えて死ぬ。誰も逃れられない。

芳次が膝を折って光悦の肩に手をかける。淀んだ光悦の目と、年齢を経てなお少年のように清涼な芳次の目が合う。

「言わば、お前は某の先達だ。清濁併せ呑むその姿勢、学ばせてもらどうぞ」

無様に生に執着しつつ、己の運命を受け止めていく。生を諦めれば剣は捨て鉢になり、運命を受け止めなければ剣は迷う。光悦はそれをぎりぎりまで成していた。

「……何とももったいなきお言葉。身に余る光栄にございます」

改めて光悦は伏して感謝する。病に蝕まれた身が変わりはない。だが、師の正忠もこの芳次も、それを超えて男として見てくれることが嬉しかった。

「それにしてももったいないな。お前、本当にシン陰流の門下になる気はないのか？」

芳次が以前から勧めているのは、光悦にシン陰流を学ぶようにとの誘いだつた。著名なシン陰流を学ぶのみならず、その師範である芳次、しかも將軍家剣術指南役からの誘いである。普通ならば色めき立って当然であるが、光悦は断る。

「……拙者は病魔に侵された身。もし芳次様やその身内の方々に病をうつしてしまつては、申し訳が立ちませぬ」

光悦の肺病は幸い伝染性のものではない。共に暮らす門下生にも、師の正忠にも彼の病がうつつたことはなかった。しかし方が一、光悦の死病が芳次に伝染した場合を考えれば、とても光悦はその誘いに応じることではできなかった。そしてまた――仮にシン陰流を学ぼうとしたところで、残された時は少ないということもある。

「しかし、お前ほどの腕があれば……いや、無理強いはせぬが」

「……重ね重ね、拙者にはもつたないほどの厚遇の誘い。感謝いたしまする」

もとより芳次ははるかに身分が上であるだけでなく、幕府に仕える柳生の身内である。逆に言えば、このような道場で好き好んで一般の剣士と渡り合う彼は、身分を気にせず剣に邁進する豪胆な侍なのだつた。

「くれぐれも、体に気を付けて励めよ」

「……はっ」

再び頭を下げ、光悦はその場を辞した。芳次の目に、わずかに憐れむような光が宿つたが、すぐに消えた。死に対して昂然と受け入れようとしているのが光悦という剣客だ。それを不憫に思うだけでなく、男児として背を見守る。それが芳次という一人の男としての敬意だつた。



第21話……………ならばせめて証を残したい



芳次との立ち会いを終えてしばらく後、光悦は悄然と町を歩いていた。彼に突かれた胸が痛むが、傷の痛みは頓着するまでもない。それよりもむしろ、光悦の思考を支配しているのはより深く、よりたちが悪い鈍痛だ。いよいよ気力で肺病がごまかせなくなりつつある。肺が痛み、動きに切れが失われていく。一生を賭して磨いた技術が消えていく。

(…………拙者の残りの命はあといかほどだ？ 近いうちにこの命の灯も消える。それまでに…………やり残すことはなんだ？)

元より幽鬼めいた光悦である。そんな彼が、人並みの生の輝きを見せた時がある。それは、藤と関わっていたあのわずかな時間だけだった。けれども、その輝きも今やくすみ、業病が汚泥のように彼の五体にのしかかっている。

光悦が足の向くまま歩いた先は、あの莊子楼だった。

「…………御免」

戸口をくぐると、とことこと出迎えに来たのは禿の藤だった。

「これは光悦様。まいどご鼻屑に」

藤はペこりと一礼した。相変わらず物怖じしないで肝が据わっている。

「…………お主に会いに来た」

「ふふ、分かっておりますとも。よろしゅうございます」

藤は手を引いて光悦を座敷に案内する。「おや、お前をご指名かい？ 青田買いだねえ」とすれ違うほかの花魁に言われるも、藤はうろたえることもせず「はい、いずれは私も姐さん方のように花開きますゆえ」と返すのだった。やがて、二人は座敷で向かい合って座る。

「今日は何をお話しましょうっ…」

光悦は静かに茶を啜る。

「それとも、お寛ぎに来られたのですか？ もちろんそれも歓迎でございます」

じろり、と光悦は藤の顔を見る。子供が睨まれたら泣きそうな三白眼だが、藤はにこにここと笑っている。狂っている故の落ち着きだ。けれども、その落ち着きに光悦は心地よさを感じていたのもまた事実だ。何を話そうとも、決して拒絶しないその狂気故の懐の深さに。

「……拙者は、おそらくもう長くはない」

ややあつて、光悦は傷口から血膿を絞り出すように言葉を発した。「肺病を患っておられる、とお聞きしました」

光悦はじつと年端もいかない童女を見つめる。

「……然り。そろそろ閻魔の顔を見ることになるだろう」

「それで？」

何かを理解したのか、藤は居住まいを正す。まるで一流の太夫のよう。

「……拙者はまだ若い。この世に未練がある」

「生死のやり取りをされる方でも、未練があるのですね」

「……なければ剣を学ばぬ」

光悦が外刀流を死に物狂いで学んだのは、誉れのためでもなければ立身出世のためでもない。生きたいと、生き延びたいとただ願ったからだ。泥を啜り血反吐を吐いてもがく生を、剣の極致によって昇華したかった。

「……ならばせめて証を残したい」

「どこへ残されるのです？」

地を這うような光悦の告白を、眉一つ動かすことなく藤は淡々と聞く。それが、病に身を蝕まれた光悦には心地よかった。だからこそ、光悦は次の瞬間異様極まることを口にした。あたかも、座ったまま刀を抜き放ち、対面の相手を一撃で仕留めるかのように。

「……藤、子を産めるか？」

その言葉の意味するところを察したのか、藤はしばし沈黙する。けれどもすぐに彼女は首を左右に振る。

「お戯れを。私は禿です。水揚げはまだ先の話」

「……だが、子を作る行為はできる」

狂ったようなことを言う光悦だが、それに怯えることなく藤は提案する。

「どなたか、うちの妓楼の姐さんを紹介しましょうか」

しかし、光悦は即答した。

「……女であれば、誰でも良いわけではない」

「つまり、私に光悦様との子を成せと？」

「……そうだ」

冷静に考えずとも、光悦の提案は狂気としか言いようがない。相手は禿だ。遊女となって床入りなどまだ先の話だ。そもそも藤は童女である。どう見積もっても年齢が幼すぎる。禿を相手に子を成せと言う光悦は、正気を疑われても仕方がない。

「……拙者は女の良し悪しは分からぬ。ただ、何にも怖じないお前のその姿は、不思議と美しく思える」

それは、無骨で口下手な光悦の精一杯の誉め言葉だった。そもそも、子を成すように藤に求めながらも、光悦は藤に情欲を抱いているようには思えなかった。まるで、藤に遺言を託すかのような必死さだけが伝わってくる。

「ありがとうございます」

光悦の賛辞を受け取り、藤は深々と頭を下げた。けれども表情は変わらない。

「ですが、私はまだ月のものが来ておりませんので、子はできません。それにこの体では、もし運良く孕んでも流れてしましましょう」

淡々と事実だけを藤は告げる。初潮さえ迎えていない童女だ。たとえ月経が始まり妊娠しても、流産は必至だろう。

「……そうか」

藤の言葉を聞き、光悦はうなずいた。断られると最初から分かっていた、彼は子を成せるかどうか聞いたようだった。果たして藤が「はい。どうぞ可愛がって下さいませ」と言った場合、本当に手を出したかどうかは分からない。ただ、光悦は病によって近いうちに潰える己の無念と執念を、藤に聞いてほしかったのだろう。

「……お前と子の両方の命が拙者によって失われるのは、間違っている」

そう言つて光悦は息をついた。光悦が藤を求めたのは欲情の発露ではない。流産は母子ともに命に関わる。藤の言葉にあっさりと言悦は彼女に対する執着を止めた。あたかも、一度か二度斬り結んだだけで、相手の力量を全て読み取つたかのように。

「ご期待に沿えず、まことに申し訳ありません」

「……無理を言ったのはこちらの方だ。すまなかつた」

「光悦様のお気持ちは嬉しゅうございます。ご縁があれば、いつかは」
まともに考えれば、初潮前の禿に子を産んで欲しいという光悦の頼みは、狂気の沙汰である。しかし、藤は分かっているようだった。これがきつと、彼の遺言であることを。



第22話：お供いたしまししょうか？



志度光悦がついに倒れて起き上がらなくなったのは、新年を迎えてしばらく後のことであった。真冬の身に染みるような寒さは、病人には辛かったのだろう。あたかも一生を鳴くことに費やし、そして終わればポトリと落ちてこと切れるセミのように、彼もまた剣を振るうことに邁進し、生涯の終わりを迎えつつあった。

「おい、光悦。客人だぞ」

石動がふすまを開け、骨と皮ばかりに痩せて床に臥せった光悦のところに一人の少女を案内した。

「お久しゅうございます、光悦様」

「……藤か。よく来た」

発熱の印紙と炭火が置かれた火鉢を避けて、光悦の布団に藤が近づいてきた。どうやら光悦が倒れたことは、吉原の莊子楼にまで伝わったらしい。よく外出できたものだ、と光悦は思う。

「ご容態はいかがでしょうか？」

「……見ての通りだ。もはや起き上がることもできぬ」

「お顔の色が良くないようで」

「……そろそろ、拙者の命も尽きる」

そう言う光悦の枕元に、藤は物怖じせず近づいた。光悦の顔には、すでに死相が出ていた。生きながらも死んでいるようなものだ。五体も臓腑も死を受け入れ、ただ気力だけが生を紡いでいる。

「光悦様の子を、成せずじまいでした」

残念そうな様子もなく、淡々と藤は言った。覚えていたのか、と光悦は苦笑した。

「……そういう定めであっただけのこと。拙者は所詮、剣の道に生きる者だった」

何もかも、巡り合わせがかみ合わなかった。藤の年齢、自分の業病、

因果と宿縁。その全てが微妙にずれていたただけだ。

「光悦様に抱かれましたら、さぞかし心地よかったですように」

「……剣の扱いは箸より自信があったが、女の悦ばせ方はいそ知らぬままだった」

光悦はか細い息をつく。思えば生涯女に触れることはなかった。禁欲だったのではない。四六時中この業病を背負った身で、婦女と戯れても楽しむことはできなかつただけだ。そしてそのまま——終わる。

光悦が布団から手を出すと、静かに藤はその手を握った。かつてこの鍛え上げた手は、己の手の延長のように刀を振るった。痩せ衰えた今の手に、その技量は何一つ残っていない。しかし、藤はまるで愛おしむようにその手をさする。小さく温かな手だった。

「光悦様は、こんな私のためにと様とかか様の敵を取ってくださいました」

「……なぜ知っている？」

もはや隠すこともない。光悦は改めて藤に聞いた。あの夏祭りの日、藤は光悦に言った。「いいえ。何人かの血の混じった臭いです。……五人ほど、でしょうか」と。藤は本当に人の血を嗅ぎ分けるほど鼻がいいのか。それとも、自分が五人の盗人の首を吉原に晒すのを目にしたのか。それを知りたかった。

「人の口に戸は立てられません。まして、吉原は沢山の噂が集まる場所ですよ。『幽霊のような顔色の悪いお侍に雇われて、悪党の根城を探し回った』と、うちの廓で酔った殿方がおっしゃっていました。ずいぶんと日銭を弾まれたようですね。後日、五つの晒し首が吉原の入りに口に並んでいました」

「……それだけで拙者の仕業だと？」

「あてずっぽうで鎌をかけてみたのですが、当たったようですね」

光悦はため息をついた。あの時藤は自分に密着していた。言い当てられた光悦の体の緊張、息づかいの変化、心臓の鼓動の高鳴り。それを藤は読み取ったのだろう。

「……拙者は未熟であった」

まるで藤は剣客のようだ。さらに藤は続ける。

「それに、夏祭りで見えた光悦様の剣は、以前よりも恐ろしかったです。人を斬った刀とは、あんな風に閃くのですね」

「……それが分かるとは、お主はたいした目をしている」

改めて光悦は驚いた。人を斬った前と後とでは殺気が異なる。より暗く、より鋭く、よりおぞましくなる。それを藤は、剣など握ったことがないのに見抜いたのだ。

「心から感謝を申し上げます、光悦様。私は生涯、あなた様を忘れません」

藤は深々と頭を下げた。狂っているとは言え、藤は何も感じない人形ではなかったのだ。両親を殺した盗人を、ずっと恨んでいたのだから。光悦によってその仇討ちはなされた。死者は生き返らず、覆水は盆に戻らない。しかし、藤の中で一つの区切りがきつとついたのでろう。

「……ありがたい。これで拙者も逝ける」

藤は光悦の目が閉じつつあるのに気づき、そつと立ち上がった。壁に立てかけてある彼の刀を手にとると、重さに苦労しながら抜く。すでに人の血を吸ったことのある、怖気を振るうような白刃の輝きがあるわになった。見る者を狂わせるような輝きだ。

「お供いたしましょうか？」

それは、藤が自刃するという意味だ。あるいは、彼に斬られてもよいという意味か。普通の子供ならば絶対に言わない恐ろしいことを、藤は狂っているゆえに平然と口にした。

「光悦様の子を成せませんでした、私は私なりにご恩に報いたいと思います」

慣れない手つきで藤は柄を畳の上に立てると、何度も間違えながら刃を自分の首筋に近づける。

藤の目は据わりきっている。その目は覚悟を決めた人間特有の静謐さで満ちており、彼女の決心を如実に表していた。このまま柔らかな首筋を刃に滑らせれば、頸動脈が裂けて藤は血の花を咲かせることだろう。

「……藤よ」

自害さえ厭わない藤を見て、光悦は大変な努力を払って身を起し、刀と彼女の首筋を引き離す。

「……黄泉路を一人で歩けぬほど、拙者は幼くはない」

濁った光悦の目と、ビードロのような藤の目が合った。死のうとするものが二人いる。方や自らの病で、方や自らの意志で。

「……死なねばならぬ者の前で、死なずともよい命を散らすな」

そこまで光悦が言うと、ようやく藤はうなずいた。再び重さに苦勞しながら刀を鞘に収める。

「そうですか。では、私はもつと後から参ります」

一瞬だけ見せた執着心のようなものはもうなく、まるで飽きたかのように再び藤は彼の枕元に座る。

「……藤」

「はい」

「……お主の成長した美しい艶姿を、見たかった」

「私も、光悦様に白無垢を着るところを見て欲しかったです」

光悦は横たわりほほ笑んだ。生に疲れ切った老人のような笑みだった。

「……達者で暮らせ。よい男に身請けしてもらい、幸せになれ」

それだけ言うと、彼は目を閉じた。浅い呼吸がかろうじてまだ続いているのを見ながら、藤は立ち上がった。

「さようなら。光悦様。……本当に私は、光悦様が望むのならば、共に逝くのも厭わなかったのですよ」

彼女は涙一つこぼさず、部屋を出て行くのだった。



第23話：その娘の名は『藤』と聞いたんだ



光悦が鬼籍に入ったのは、その数日後だった。静かに、線香の火が燃え尽きるかのような最期だったという。葬式には外刀流の門下生らが参加したが、弔問客の数は少なかつた。莊子楼から徒桜と藤も参加し、藤は無言で彼の霊前で合掌し、焼香をすませた。

(とと様、かか様)

心の中で、藤は呼びかけた。

(私の望みは叶いました。光悦様は、確かに仇を討って下さいました。あの方は今、安らかに眠っていることでしょう。私はこれからどうしたらよいのでしょうか?)

その答えは返ってこない。そして藤自身も、恐らく答えを望んでいなかった。もうしばらく経てば、そんな疑問を抱いたことさえも忘れてしまうことだろう。

「光悦殿は不思議な剣客だったな、藤」

隣の徒桜がそう言う。

「はい。私のような禿に興味を持たれるという時点で不思議でした」「いや、そういう意味ではないが……。最後の見舞いに行った時、彼はなんと言っていた?」

「幸せになれ、と」

「そうか……」

徒桜は男泣きをしたらしく目の赤い石動に頭を下げつつ、葬式の間行われた場所から出る。

「彼の遺言を守れ、藤。生きている以上、私たちは死者とは違い明日がある」

「はい」

「私たちも、いつ死ぬか分からぬ身だ。悔いなく生きよう」

「ええ。分かっておりますとも」

二人はそう言い合ふと、葬儀の場から出て行つた。葬式が終わると、志度光悦の名は一部の者たち以外から忘れ去られていった。あたかも、風に吹き散らされたかのように。

後に徒桜は三津屋の長男で、氣立てもよく器量もいい若者に身請けされ、生涯をその店の発展に捧げた。のんきな若旦那に対し、男勝りでした。徒桜は本名である八雲を名乗り、時に夫を立て、時に夫の尻を叩き、二人は仲睦まじい夫婦としてその後を過ごしたらしい。

そして、成長した藤はその後遊女として人気を博した。何しろ芸事にも優れ、華やかな美貌の持ち主だ。しかも、どんな客にもなびくようにでなびかない不思議な花魁だった。誰にでも話を合わせ、どんな座敷でも華やかにし、そして床にも共寝する。しかし、縁談や身請けにはまったく応じなかつたのだ。

吉原に通う色男たちは「俺こそが藤を落として見せる」と奮起したが、結局誰も彼女の心を揺り動かすことはできなかつたという。やがて、藤の名が江戸の庶民にまで知れ渡り、彼女が人気者になつていったその頂点で、彼女は今まで貯めた金で自分を身請けし、出家すると言つたのだ。突然のことに周りには驚いたが、藤の決意は固かつた。

「……藤は、本当にこれでよかつたのか？ お前が望めば、裕福な商人のそばめとして生きる道もあつただらうに」

すつかり大店の妻としての立ち居振る舞いが身についた徒桜が言う。しかし藤は満足げに言つた。

「いいえ。私はこのまま、仏の道に入りたいと思います。もとより私は天涯孤独の身となつています。尼として生きるのも必定でしょう」
彼女は惜しまれつつ、寺に入り尼となつた。尼僧となつた藤は子供たちに優しく、読み書きを教える傍ら、貧しい者たちのために炊き出しを行い、時には病人の看病も行つた。誰に対しても優しく、彼女はいつも笑顔を絶やさなかつた。そんな彼女の姿を見た人々は「まるで菩薩のようだ」と噂したという。その後、江戸の人々はこう語り合つた。

「吉原に一人の美しい娘がいたんだってよ。その娘の名は『藤』といったんだ」

「知ってるかい。そいつには病身の侍がいてねえ。名前は忘れちゃったんだが……」

「今となってはどうだろうなあ。もしかすると、本当は惚れてたのかもな」

藤の墓は今もその寺にある。そこには彼女の骨とともに、あの光悦の形見となった刀が埋められているそうだ。



第24話：お前は死に損ないなどではなかった



いつからだろうか。気がついたら、という言葉さえ適切ではない。光悦は、そこに座っていた。ずっと前からそうしていたのかもしれないし、今さつきここにたどり着いたのかもしれない。とにかく光悦はここにいた。「ここ」がどこなのかも分からない。今が「いつ」なのかも分からない。ただ、光悦はそこに座っていた。多くの人が通り過ぎていく。

老若男女とおぼしいが、はつきりと顔や姿は分からない。連れ立って歩く者。一人で歩く者。逃げるように走る者。しきりに後ろを振り返る者。誰も、光悦に気づく者はいない。

(拙者は……死してなお迷っているようだ)

自分はどうやら、死んだことにさえ気づかない幽霊のようなものになっているのだ。そう彼は理解した。

そう思いながら、光悦はただ座っていた。ここから動く気はなかった。誰にも急かされることもない。ここが地獄ならば鬼や獄卒がやってきて自分を追い立てるはずだが、そういう風でもない。かといって、仏や地蔵菩薩が来て浄土へと導く様子もない。そもそも、人斬りが極楽に行けるなどとうぬぼれてはいない。

「光悦。こんなところにいたのか」

やがて、誰かが自分の前に立ちどまり名を呼ぶので、光悦は目を上げた。

「お師匠様」

そこにいたのは、彼の学ぶ外刀流の師匠である長谷川正忠だった。心なしか最後に見た時よりも背筋が伸び、足腰もしっかりしている。「やはりと思ったが、まだここに留まっていたとは。あまり執着が過ぎると亡者になって現世に仇をなすぞ」

「申し訳ございません。しかし、どうしてもこの先に進む気が起きず、

ここに座しております」

「やれやれ。まあ、生前のお主は肺病に長く苦しんだのだ。しばらくそこで休め」

正忠は白髭を手で扱きつつ、最初から分かっていたかのようにため息をついた。

「僕はお前に剣を教えたが、どう生きるかまでは教えられなかった。不出来な師を許せ」

「そのようなことは決して」

光悦は立ち上がって頭を下げる。

「このような死に損ないを最後まで見捨てずに教えて下さったこと、何と感謝を申し上げてよいものか」

「お前は死に損ないなどではなかった」

正忠は苦悦の言葉を遮る。

「生き恥を晒してでも生き延び、外道と誹られても大義を成す為の剣、此外刀流の理なり」

改めて自らの流派の根幹を正忠は口にする。

「死病に苦しみがくお前を、我が流派が救うことができたのならば——」

「拙者は救われました」

光悦は改めて師を見る。異様な構えと異様な脚捌きを特徴とする外刀流には似つかわしくない、厳しく無骨で、真つ当で誠実な師匠だった。

「お師匠様は、拙者におっしゃいました」

光悦はかつて正忠が発した言葉を思い出す。

「拙者の病苦を肩代わりしてやりたい、と。あの言葉に、拙者はどんなありがたい経文よりも救われたのです」

そうだった。あの忌まわしく苦痛しかもたらさない肺病を、肩代わりしたいとまで正忠は言ってくれたのだ。あたかも衆生の苦しみを背負う地藏菩薩のように。それは確かに、光悦の救いだった。

「長谷川正忠様こそ拙者の師匠であり、外刀流こそ拙者の剣であります。真に——真に——ありがとうございました」

万感の思いを込めて光悦は言葉を発する。しばし正忠は沈黙した。やがて、静かにうなづく。

「儂は幸せ者だ。良き弟子に恵まれた」

ほんの一瞬だけ、正忠の顔が好々爺のように弛み、しかしすぐにその顔は元に戻る。

「儂は先に行く。門弟が来たときにいちいち儂のことなど伝えるでないぞ」

「心得ました」

光悦は素直に頭を下げた。そつと彼の手が光悦の肩に乗せられる。

「お前が何かをここで得るのを、祈っておる」

それだけ言い残し、正忠は振り返ることなく去っていった。その潔い背を光悦は見送り、再び彼はその場に座り込み、視線を落とす。

「藤……」

ぽつりと呟く。自分は死んだ。剣客である以上、死を恐れてはならぬ。死よりも恥を恐れるべし。しかし、外刀流は恥にまみれても生き延びる外道の剣術。それを学んだのは、死病に追いつかれる前に何かをつかみたかったからだ。あの藤という禿。両親を目の前で殺されたことよって狂った禿は、不思議と光悦の心をとらえていた。

屈託のない笑顔と、痴れた故の度胸の据わったふるまいは、死病に追い立てられる自分とは対照的だった。余命いくばくもない時に彼女に「子を成せるか」と聞いたのは、一つは生きた証を残したかった故。そしてもう一つは——焦るような執着だったのだろう。生前常に共にあった大小が今はない。それでもただ、座ったまま光悦は何かを待ち続ける。



第25話：未練がましいことに、人を待っているゆえ



「あくあ、まったく我ながら阿呆な死にざまだったぜ。おい、光悦」
目を上げるとそこには、あの女好きの蜂須賀甚六がいた。

「甚六殿も来られましたか」

「おう。妓楼が火事になってなあ。惚れた女を助けに火に飛び込んだら、煙に巻かれてこのざまさ。へへっ、まさか刀難じゃなくて火難で死ぬとはなあ。いや、女難で死なないだけましか」

「その女性は？」

「助かったらしいな。ちえっ、一緒に死んでりや手に手を取って死出の旅路、来世は仲良く番鳥（つがいどり）と洒落込めたんだが……まあ仕方ねえな。これでも俺あ幸せ者だぜ」

そう言いつつも、まるで甚六は未練がある様子ではなかった。一人で逝くことに悔いがある様子はない。その様子を見て、つくづく自分の違いを光悦は痛感した。

「向こうにや美人がどれだけいるんだろうなあ。楽しみだぜ。お前は……まだ行かねえようだな」

「未練がましいことに、人を待っているゆえ」

真面目に光悦が答えると、にやにやと甚六は笑う。

「まったく、お前も隅に置けねえな。そんなにあの禿に惚れ込んだのかよ。やっぱり童女が趣味じゃねえか」

「いや、それは誤解です」

「いいさ。俺だつて似たようなもんよ。惚れた女なら年増だろうとなんだろうと……おっとこれ以上は言えねえな。ともかく、待てば海路の日和あり、だ。せいぜいうまくいくように願掛けしてやるぜ」

「ご厚意、感謝いたします」

そう言つて、光悦は頭を下げる。頭を上げるともう、そこに甚六の姿はなかった。

再び待つ時間が流れる。人、人、人。縁のない誰かが、生者の世界から死者の世界へと歩いてくのを、光悦は見送る。人の流れは灰色の霧のようで、誰が誰なのか分からない。ただただ流れていくだけだ。(拙者も、いずれこうなるのか)

自分はこのまま座したまま朽ち果てるのかもしれない。そうなれば、やがて自分もあの人の波の一部になるのだ。



「おい、おい、もしかして光悦かよ。ひゃあ、懐かしいねえ。まさか向こうに行く前にここで会うなんてなあ」

次に現れたのは河村勘兵衛だった。

「勘兵衛殿、お久しぶりにござる」

「あはは、全く変わらねえな、おめえは。あ、死んでるんだから当然か。って俺もそうだったけな」

立って頭を下げる光悦に対し、ひょうきんな様子で勘兵衛は笑う。

「勘兵衛殿は、その後いかがであられたか」

「ああ。俺とお前が死んでからしばらくして、田舎に帰ってな。器量はそんなでもないが働きの嫁を迎えて、まあそれなりにやったさ。子供にも恵まれて結構いい暮らしもできたぜ。いい嫁がいるってだけで俺は幸せ者さ。あいつは去年先に逝っちゃってな。寂しくて……はは、もう来ちゃった」

「では、拙者にかまわずどうぞ先へ。女房殿がお待ちのはずです」

光悦が手で向こうを指すと、勘兵衛は頭をかきながら笑った。

「おう、俺のお幸が待ってるってなりや、早く行くのが旦那の務めってもんよ」

そう言いつつ、親しげに勘兵衛は最後に光悦の肩を叩いた。

「じゃあな光悦。お前もさっさと来いよ」

足早に走り去っていく勘兵衛の背を見送り、光悦は再び座る。よい人生を送れたらしい同門を見て、ほっとする気持ちが沸き上がってきた。肺病に苦しまない今、光悦は生前味わったことのない穏やかな気

持ちを堪能していた。自分が木石になったかのようなようだ。これもまた、悪くない。ただ一つの未練のみをのぞいて。



第26話：俺はお前の兄弟子だ。弟のことを氣遣うのは当然だ



「志度光悦。顔を上げろ」

懐かしい声に、光悦は声を上げた。塗り壁とも呼ばれた巨漢の石動有馬が、むすつとした顔でこちらを見ていた。

「石動殿。あなたも来られましたか」

「ああ。俺の言ったことを覚えているな」

「はい」

そう言った瞬間、光悦の頭に石動の拳骨が落ちた。懐かしい感触と衝撃と痛みだ。このサザエのような大きさが懐かしい。

何度となくこの兄弟子には拳骨を食らったが、そのすべてはこちらを思いやつての鉄拳制裁だった。嫌だと思つたことや憎いと思つたことは一度もない。痛みがなければ時に覚えられないのが剣術である。油断すれば指を落とし、目を潰し耳鼻をそぎ落とすのが刀の鋭さ。それを扱うとき気が緩んでいれば、拳骨で引き締めるのも道理だ。

「馬鹿者。蟬のようにさっさと死におつて。お前が死んだら鉄拳制裁してやると言つた約束、果たしたぞ」

「石動殿の御恩情には、生前何一つ返せませんでした。不肖の弟弟子とお笑ください」

「お前は本当に愚かだな。死んだ後になって言うとは。そんなだからお前はいつまで経つても半人前なのだ」

「申し訳ありません」

謝ると、再び拳骨が落ちる。だが、不思議と怖くはなかった。殴っている石動の目元に涙があったからだ。つくづく、情の深い素晴らしい兄弟子だった、と光悦は思う。

「拙者などとうの昔にお忘れかと」

「忘れるものか。肺病に七転八倒しつつも刀を握るその姿、外刀流のあるべき姿そのものであった」

「もったいないお言葉です」

石動はその場で少しだけ話をした。彼が正忠亡き後外刀流を継いだこと。幕末となり、日ノ本の世が大きく動こうとしていること。

「時代は変わった。武士の時代は終わり、海の方の英吉利、独逸、亜米利加。そういった国々が進出してきた。日本はいずれ列強諸国に肩を並べるだろう」

石動は遠い目をする。新しい時代の曙光を見た者の目だ。

「俺は剣を極めることは叶わなかったが、師から継いだものを次代に託すことができた。俺は幸せ者だ」

「石動殿こそ、外刀流の要でした」

「よせ。お前の腕ならば、あるいは病さえなければ流派を継いだのはお前だっただろう」

そこまで言うと、石動は言葉を切り、光悦を見つめる。

「……あの禿、藤について聞きたいか？」

光悦はうなずく。

「藤はお前が亡くなった後、立派な花魁となった。江戸の男の誰もが一度は会いたいと願う太夫だぞ。客のどんな無理難題も笑顔でこなし、床入れでも相手を満足させる。まさに吉原一の花魁と誉めそやされたのだ」

「そうでしたか。一度見てみたかった」

光悦は美しく成長した藤を思い描こうとする。しかし、記憶の中の彼女は禿であり、うまくできない。

「だが、藤は人気の頂点で自分を身請けしてな。その後尼になった」

「尼、ですか」

「ああ。むしろ尼の時の彼女の方が生き生きとしていたな。寺子屋で子供たちに文字を教え、時には芸事を披露し、老人には優しく、貧しい者たちには炊き出しまで行った。皆彼女を菩薩のようだと称えたぞ」

光悦は尼僧の藤を想像する。雰囲気だけは何となく思い描けた。

「そして、彼女は俺が死んだときもまだ尼としてあの寺にいた。俺が言いたいことは分かるな」

「はい。何とお礼を申し上げてよいか」

光悦は深々と頭を下げた。

「俺はお前の兄弟子だ。弟のことを気遣うのは当然だ」

石動は細身の光悦の肩に、大きな手を置いた。

「お前と剣を共に学んだ時間は短かった。お前はあまりにも早く死んだからな」

石動の手の重みが光悦には心地よい。

「だが、その短い時間の中で俺が見たのは、お前の刀に対する貪欲な姿勢と、それに見合う実力、そしてお前の飾らない真摯な人柄だった。

お前は間違いない一流の剣客であり、男児だ。胸を張れ」

「ありがとうございます」

もう一度、光悦は頭を下げる。そして再び頭を上げた時、もうそこに石動の姿はなかった。

「石動殿、感謝いたします」

最後まで潔い石動らしい去り方だ。自分のような異形の剣に対し、石動の剣はいつでも正々堂々としており、甲冑を着たことを想定した重く緩やかな動きの外刀流を体現していた。その彼に認められたのだ。光悦は静かな喜びを胸に抱いたまま、再び座し、待ち続ける。待つことだけが彼に遺された全てだった。



第27話：藤は幸せだったさ。私が保証する



「おや、そこにおられるのは光悦殿ではないか。まさかここで会えるとは思わなかった」

華やかな女性の声がして、光悦は目を上げた。

「徒桜、お主か」

そこに立っていたのは、こぎつぱりとした着物姿の徒桜だった。花魁の派手な着物や髪飾りはなく、今の彼女はずいぶんと動きやすそうだった。

「ああ。今は八雲と呼んでくれ」

「そういえばそうだったな」

彼女の兄が彼女を八雲と呼んでいたことを、光悦は思い出す。

「まさか死ぬとこうなるとは思わなかった。何事もやってみなければ分からぬものだな、ははは」

腰に手を当てて男のような仕草で笑う徒桜を、光悦は歌舞伎者を見る目で見ると。

「何とも男勝りだったのだな、お主は」

以前からそう思っていたが、死して後彼女は素に戻っているようだ。

「うん？ ああ、着飾って紅をつけて白粉を塗り、科を作るのも悪くはなかったぞ。だがそれも遠い昔。私は三津屋の若旦那にいたく懸想されてなあ。結局絆されて彼の嫁になった。のんきな亭主に発破をかける日々の方が長くてな、許されよ」

「良き生涯を送れたようで何よりだ」

光悦は心からそう思う。彼女もまた、人生を精一杯生きたのだらう。

「まあ、人間万事塞翁が馬、吉原に来た時はいよいよ万策尽きたかと思っただが、終わってみれば私は幸せ者だった。多くの方々のおかげ

だ」

「そこまで言うてから、徒桜はいぶかしげな顔をする。

「して、そなたはなぜここにいるのだ？ まさか極楽から締め出しを食らったのか？ もしそうなら私が行ってももの申してくる故、出立の用意をしておかれよ」

極楽の神仏に抗議するつもりらしい徒桜を、慌てて光悦は制した。

「拙者は人斬り故、極楽に行けるなどとうぬぼれておらぬ」

「まさか。そなたのようなまともな侍が、悦楽で婦女子を殺めたわけではあるまい。私の兄を斬ったのは成仏のため。そなたが人を殺めたのならば、相応の理由があつたはずだ。光悦殿は、地獄へ行くような悪人では決してない」

堂々とそう言う徒桜に、光悦は温かなものを感じた。流血を厭わぬどころか求めてきた自分の剣にも、わずかな救いはあつたのかもしれない。

「ふむ、ではなぜだろうか。そなたの幽霊が出たという噂も聞いたことがない」

徒桜は首を傾げる。

「未練がましくも、人を待つておる」

「誰だ？」

ためらいつつ、それでも光悦は正直に告げた。

「……藤だ」

しばらくぼかんとしてから、徒桜は呵々大笑した。

「あつはつは！ あい済まぬ！ 殿方の情を察することもできぬとは、元太夫とはとても思えぬ失態であつた！」

気を遣われてしまい、しばし光悦は穴があつたら入りたい心境だった。

「何とも恥ずかしいが、どうしてもここから動くことができないのだ」
しかしすぐに徒桜は柔和な目で彼を見る。

「恥じることはないぞ、光悦殿。きっと藤もそなたが待つていて嬉しみに違いない。何しろ——」

「——藤は若くして尼になった、と聞いた」

「おや、誰かに聞いたのか。そうだそうだ、吉原一の太夫が人気の絶頂で尼御前となったのだ。それはもう、花街がひっくり返る程の騒ぎだったな。思えば、あの子なりに光悦殿に義理を立てたに違いない」
石動には言えなかったことを、光悦は徒桜に言う。

「拙者は良い男を見つけて幸せになれば、と申したのだが」

自分は藤のことが未練だったが、それは彼女に伝えなかつたはずだ。むしろ死んでしまえば自分のことなどさっさと忘れて、良い男と結ばれて幸せに生きて欲しかった。それが比丘尼とは。いささか彼女のその後の生を縛つたようで気が引ける。

「藤は幸せだったさ。私が保証する」

徒桜はそう断言しつつ、にやりといたずらっぽく笑う。

「つまり、あの子がここに来てても亭主持ちではないから遠慮することはないぞ。手に手を取って旅立つといい」

「いや、拙者は遠慮など……」

と言いかけてから、いい加減認めなくては、と光悦は思う。藤が来ない限り、自分はここから一步も歩けないのだ。

「——分かった、八雲殿」

「藤をよろしく頼む、光悦殿。私は先に行くぞ。亭主が待ちかねているだろうからな」

一礼してから徒桜は歩き始める。しかし、ふと振り返った。

「そなた——私の記憶の中の光悦殿と見比べても、今が一番良い顔をしておるぞ」

それだけ言つて、彼女は悠然と歩み去つていった。その背を見送りつつ、光悦は再び腰を下ろした。



第28話：拙者もまた――



「――光悦様、光悦様。こんなところでお昼寝ですか？　もう風邪などひかぬ身とはいえ、おやめ下さいませ」

懐かしい声があった。鈴を振るような少女の声だ。眠っていたのか意識が曖昧になっていた光悦は、その声で目を開けた。ずっと待っていた人が、ようやく来たようだ。光悦はゆっくりと頭を上げた。

「藤か」

そこには、彼が最後に見た時と同じ姿の藤がいた。成長した美しい花魁でもなければ、穏やかに老いた尼の姿でもない。まだあどけない少女の姿の藤だった。

「はい。お久しゅうございます。一日千秋の思いだったことでしょうね」

「いや……そうではない」
いざ待ち続けた藤と再会すると、光悦は急に気恥ずかしくなった。

そもそも、自分と藤の関係はさほど深いものではなかったはずだ。目を落として、今さらながら光悦は気づいた。自分が帯刀していなかったことを。

「お届けに上がりました」

「なに？」

「お腰のものをお忘れでしたよ。ですので、私がこれをお持ちしました」

どこからともなく、藤は重そうに大小を取り出して光悦に差し出した。

「かたじけない」

光悦は刀を受け取る。今まで感じなかった重みが手に伝わってきた。長い間握っていなかったので、重さを忘れてしまっていたのだ。

しかし、腰に帯びるとしつくりときた。よく今まで気づかなかつたものだ。自分とこの刀とは不可分の関係だつたはずなのに。そしてふと思う。藤が自分と再会する理由として、刀を持ってきてくれたのだろうか、と。

「どうしました？」

「なぜ禿の姿だ？ お前は、尼になつたはずではないのか」

光悦としては、花魁の藤でも尼の藤でも会えるのならば構わなかつた。

「あら、どなたか既知の方からお聞きになられましたか。でもよいではないですか。私がこの姿でお会いしたかつたのですから」

藤は何食わぬ顔でそう言う。

「そうだな。その姿のお前に会えて嬉しい」

「ふふ。口がお達者ですこと」

藤はころころと笑う。その様子はまるで小鳥のようで、大変に愛らしかつた。思えば、禿の藤しか光悦は知らなかつた。ならば、この姿で藤が現れるのも道理だろうか。あまり禿の姿にこだわると自分が妙な性癖の持ち主に思われそうだが、世間体というものはもうここにはない。半ば諦めて光悦は目の前の禿を受け入れる。

「死病を患う拙者に、未練などわずか、と思つていた」

藤の光悦を見る目は、在りし日と変わらない、何一つ物怖じしないものだ。その目に惹かれたのだった。だが、今の藤の目にもはや狂気はない。

「藤、お主に最後に会つた時、拙者は言つた。『黄泉路を一人で歩けぬほど、拙者は幼くはない』と。情けないことに、拙者は幼かつたようだ」

「ええ。よく存じております。ですから、こうして私が来たのですよ。割れ鍋に綴じ蓋、と昔から言うのではないですか」

まるで諭すように藤は言う。

「成仏せずにいる拙者を見て、無様とは思わぬのか？」

「殿方の重たい情を向けられるのには慣れておりますので」

さざりと藤は流す。彼女が尼として長く人々を助けてきた、その人

生の厚みを感じた。

「すまぬ」

「謝らないでくださいませ。それに、光悦様は今ここにおられるではありませんか」

藤はそつと光悦の手を握った。あの時、死の床にあつた時に藤が手を握つてくれたことを光悦は思い出す。不思議なことに、死しているというのに藤の手はあの時と同じく、柔らかで温かだった。剣など握つたことのないその手の感触がひどく心地よい。

「光悦様が私のことを覚えていてくださったように、私も光悦様のこととをずつと覚えていました」

光悦はその小さな手を握り返した。

「よい男に身請けしてもらい、幸せになれ、と拙者は言つたはずだ」

「私は充分幸せ者でした。ただ、良縁には恵まれなかつただけですよ」

光悦の言葉などどこ吹く風、と言わんばかりに藤は平然と返す。

「戯言を。吉原一の花魁など引く手数多であつたらうに」

「まあ、焼き餅ですか？」

「茶化すでない」

光悦は苦笑する。記憶の中の藤はいつもこうだった。光悦の四角張つた言動を軽くいなししてしまう。それが藤なりの気遣いであると、今は分かるのだが。

「藤、お前はもう吉原の遊女ではないのだろうか？」

「はい。そして尼でもありません。ですので、共に行くことに後ろ指を指されることはありません」

藤はそつと手を引く。あの、進み続ける無数の人の流れへと。しかし、光悦は一步を踏み出さない。

「光悦様、どうかなさりましたか？ やはり、気が進まないのですか？」

「いや」

光悦は藤の肩に手を置いた。

「ただ、お前に会えたことが嬉しくてな。言葉が出てこなかつただけだ」

「ふふ、そういう誉め言葉、できれば生前お聞きしたかったです」

「あの時のお主はまだ禿だっただろう」

そう言いつつ、ようやく光悦は一步を踏み出した。思いのほか足取りは軽かった。

「どこへ行くのだろうな」

仏僧の説話で聞いたあの世とは、この先は少し違うような気がする。

「どこでもいいではありませんか。せつかく塵界のしがらみから離れられたのです。花鳥風月の如く、行雲流水の如く、自由に行きましよう」

「ああ、そうだな」

藤に手を引かれ、光悦は歩く。どこだろうか、ここは。春の桜並木のようにあり、夏の海岸のようにあり、秋の薄野（すすきの）のようにあり、冬の山野のようでもある。

ただ、ひどく心が穏やかになる。懐かしく、郷愁をかき立てられる場所だ。

「お主の父母に会わねばな」

何気なくそう光悦は呟く。これが他界への道ならば、その先に藤の父母がいることだろう。きっと藤にとっては、待ち焦がれた再会となるはずだ。

「まあ、律儀ですこと。『娘をくれ』とと様におっしゃいますか？」

「お主も会いたいだろう？」

「ええ、もちろん。ですが——」

そつと藤は身を寄せる。着物越しに藤のぬくもりを確かに感じた。

「今はこうしているのが、心地よいのです」

「拙者もだ」

多くの人が行き過ぎていく。けれども、誰一人として二人に気づく者はいない。彼らは彼らの道を行く。だからこそ、ようやく光悦は正直に自分の思いを告げた。

「お主を未練がましくずっと待っていた」

「はい。一目見て分かりましたよ。まるで迷子のようにでした」

「共に来てくれるか？」

「お望みのままに」

その言葉を、自分はずっと待っていたのだろう。ようやく、未練というものが消えていくのを光悦は感じていた。

「皮肉だ。死してようやく、生きることは何かを悟るとは」

孤立無援。それが志度光悦という男の生だった。死病を患い、他の者たちが当たり前のように享受する生きる喜びを知らずに、ただ這いずるようにして生きてきた。だからこそ、彼の剣は異形の流派である外刀流によって冴え渡った。彼にとって生きるとはもがくことであり、生の実感とは病の苦悶だった。

それなのに今、心はこんなにも穏やかで明るい。隣に藤がいてくれること——それが望みだったのだ。人を愛しく思うこと——それが生だったのだ。今ようやく、生きることの歓喜を知った心は晴れやかだ。

「あら、光悦様。そのお顔は初めて見ました」

ふと、光悦の顔を見上げた藤がそう言う。

「どんな顔だ？」

「晴れ晴れとお笑いになられた顔です」

そうだろう。思えば一生涯病と共にあった生だ。今までの光悦の笑みとは、猫がネズミをいたぶるときのような、死闘を前にして冷えた血を滾らせる不気味なものだった。だが、死してようやく、生の苦渋から解き放たれたのだ。もう、無理やり口角を釣り上げる必要はない。ただ——心のままに笑うことができる。

「男前ですこと」

「相変わらず、お主は口が上手だ」

「太夫でしたから」

「ふっ……」

「あ、また笑いましたね？」

「いや、すまぬ。あまりにもお主らしいと思っただけ」

光悦は藤の手を握る力をわずかに強める。すると、藤は指を絡めてきた。温かくて、柔らかな手。そして、安心するような匂い。

「この先どうなるのか、拙者には分からぬ。しかし、それでも共にいてくれ」

「はい。もちろんです」

そうして二人は歩き続ける。その道は果てしなく長く、けれど、何一つ不安はなかった。光悦は空を見上げて、眩く。

「拙者もまた——幸せ者であった」

とある無名の剣客と、とある有名な花魁の話はここで終わる。しかし、きつと二人の物語はまだ続いていくことだろう。

花鳥風月の中に、行雲流水と共に——どこかで。



(完)